

金春宗家藏『宴曲集卷第一』影印・翻刻・解題

——能と宴曲——

神田裕子

一、はじめに

能楽を生み出した、演劇的・音楽的な基盤としての先行芸能は数多いが、その中の一つに、宴曲（早歌）がある。鎌倉時代中期、明空によって集大成された宴曲一七三曲は、早歌とも呼ばれ、室町時代末頃まで歌われた。宴曲の中興の祖とされる、坂口坂阿・口阿父子が最も活躍したのは十四世紀半ばから十五世紀であり、これは、観阿弥・世阿弥父子や、金春禪竹の活躍した時期と合致する。当時の猿楽役者たちが、宴曲とどのように関わったかを知る手がかりは、吉田東伍「宴曲とは何ぞ」、外村久江「早歌関係史料」によって、既に指摘されている。宴曲と能楽の関係を考察するにあたって、再度ここに掲げ、確認しておきたい。

世阿弥自筆本「江口」（応永三十一年（一四二四）九月廿日の識語）には、

上サウカフシ

アキノミツ ミナキリヲチテ サルフネノ 月モカケサス サヲノウタ

ウタエヤウタエ ウタカタノ……（世阿弥自筆能本集 校訂編）

とあり、早歌の一節を引用している。ちなみにこの一節は、「真曲抄」所収「対揚」

秋の水漲来は 舟さること速なり（外村久江・外村南都子『早歌全詞集』）

などの影響が考えられている。ただし、この「対揚」の一節と世阿弥自筆本「江口」の詞章は完全に一致しておらず、「サウカフシ（早歌節）」というのは、「対揚」の詞章を転用したことを示すのではなく、早歌という歌謡の唱法を転用したことを意味するものである可能性の方が高い。

また、世阿弥自筆本「柏崎」にも、

アライトウシヤ コノヒタ、レノヌシワ ワカツマナカラ ユミワ三モノトヤラ
ンヲ イソロエ ウタレンカ サウカ コウタモシヤウスニテ マタサカモリナ
ントノアソビニモ……（世阿弥自筆能本集 校訂編）

とあり、当時早歌が、和歌や連歌などと同様に日常的な存在であったことが伺える。『申楽談儀』の（七、祝言の音曲）の項にも、

甲のものなれども乙とつくること有。こゑに四重有ときは、三重を乙とつくる也。

早歌に有。猶くかくのごとくのはうやう、口伝有べし。（『申楽談儀』）

とある。この箇所のおく語訳は「元来は甲（高音）のものであつても、場合によって乙（低音）と名付けることがある。たとえば、より高い四重の声がある場合には、元来は甲である三重の音を相対的に乙と名づけるのである。」となる（同書補注による）。世阿弥は早歌を謡った経験はあつたであろうし、世阿弥や世阿弥周辺の人間は、早歌の謡に精通していたと考えてよいだろう。

右の事例はいずれも、世阿弥周辺のものであるが、金春禪竹・禪鳳が早歌に精通していたことを示す事例もある。

『五音三曲集』（長祿四年（一四六〇）十一月十一日識語）の「一、拍子之事」の項に、拍子之事。是はおのづから此家にむまる、もの、さるがく拍子はしるもの也。（中略）大かた、拍子の心ね如し此なるべし。さう歌におす拍子あり。当流にもおす心ねあり。是等は皆口伝あるべし、鼓にしらべのひやうし、同し之。……（『金春古伝書集成』）

先に挙げた『申楽談儀』の事例と同様、早歌の謡、拍子に精通していなければ、傍線部のように言うことはできない。また、金春禪鳳の『音曲五音』（禪鳳の二つの伝書の合写本。永正十三年（一五一六）十二月廿六日の識語の分）にも、

一、うたひを五色にうたひ分候と申事は、節にも文句にもよらず候。（中略）萬の声明・音曲の中に、うたひは大事と存候。其子細は、早歌・平語、又は諸衆の声明を聞候に、大形おもしろさやうに聞え候。同音などもちがひ候はぬやうに聞え候。（『金春古伝書集成』）

とある。能の謡に限ったことではなく、一般的な声明、音曲においても、謡は大事である、具体的には、早歌・平家語り、又は諸宗諸派の声明を聞くと、おおかた面白い様子に聞こえる、というような意味であろう。この記事では、世阿弥や禪竹のように自身が早歌に精通していた、とまでは言い切れないが、禪鳳も早歌に日常的に慣れ親しんでいた、ということは言える。

また、外村久江氏は、永享八年（一四三六）正月廿八日の『看聞御記』の記事を揚げ、観世三人が出席した和歌連歌の会において、早歌も行われている事例などを掲げてい

る。

これらの事例は、すでに先学の指摘したものであるが、世阿弥や禅竹が、宴曲とどのように関わったか、能と宴曲がどのような関わりをもったかを考察する上で、踏まえておかなければならない事実である。世阿弥や禅竹といった室町時代の能役者の中でも限られた存在だけが、宴曲と密接な関わりを持ったのではなく、おそらく、当時の能と宴曲との関わりは、現代の我々が考える以上の度合いであつたであろう可能性を考慮する必要がある。

二、金春宗家蔵『宴曲集巻第二』について

前掲の事例を見ただけでも、室町時代の能役者が宴曲と密接に関わったことは、想像に難くないが、今回それをさらに裏付ける資料の存在を、現在の金春宗家である金春安明氏からご教示いただいた。金春宗家蔵『宴曲集巻第一』がそれである。

【書誌】

【所蔵】金春宗家

【形態】写本、一冊

【時代】〈室町前中期〉

【寸法】縦二五・一糎×横一六・九糎

【表紙】薄茶色表紙。わずかに雲母が残る。押八双。

【外題】ナシ

【内題】宴曲集巻第一 四季部

【料紙】斐紙

【装丁】綴帖装

【丁数】目録二丁、本文二二丁。（最終丁を切除した跡がある。）

【識語】（約二行分、文字を摺り削った上から墨書。）

今春太夫／秦鎖喜《花押》

本項では、この金春宗家本がどのような性質のものであるか、また、宴曲諸本における位相について、考察する。

宴曲伝本に関する先行研究のうち、特に本稿と密接に関わるものは、外村久江「早歌十六冊伝本の研究」と、蒲生美津子「早歌譜諸本の書誌」の二本である。外村久江氏は、宴曲の伝本を「早歌の歌われた当時に、その歌謡を歌うために使われた本、即ち、これは主として室町時代の書写にかかるもの」と、「それらを筆写した徳川期以降のもの」の二種類に分類した。また、蒲生美津子氏は、外村氏の分類のうち、歌うために使用した本について書誌的考察を加えている。

金春宗家本は、一見して室町期の書写とわかるものであり、「歌うために使われた

本」、少なくともその用途に堪えうる本であることは、後に述べる特色から考えても、明白である。江戸期以降の転写本の中にも、ふりがなや音楽的表記まで精緻に書写したものもあるが、同時期の宴曲伝本との比較が重要であると判断した。

金春宗家本以外に、現在所在が確認されている、室町期以前書写の『宴曲集巻第二』は、以下の四本である。

○大東急記念文庫蔵本（函架番号32.883）

一冊。〈室町初期〉写。高田藩榊原家旧蔵。縦二五・六糎×横一八・四糎。紺色に鳳凰丸紋模様綴子表紙（本文共紙の元表紙の上に、改裝表紙をつけたようである）。表紙左肩、赤茶地に露草模様の題簽、墨書「宴曲集巻第一」。内題「宴曲集」。料紙、厚手の斐紙。胡蝶装。墨付、二七丁。遊紙ナシ。本文五行。奥書ナシ。なお、本書は『大東急記念文庫善本叢刊』（二〇〇三年四月刊行中）に収録されることが決定している。

○冷泉家時雨亭文庫蔵無署名本

十三冊（宴曲集巻第一一五）、「宴曲抄上中下」、「真曲抄」、「拾葉集上下」、「拾葉抄」、「別紙追加曲」のうちの一冊。影印ならびに書誌解題は、伊藤正義解題『冷泉家時雨亭叢書44 宴曲 上』に所収。

○大原三千院蔵本

「宴曲集巻第二」に「宴曲集巻第二」の二丁を加えた合綴本。原本未見だが、外村南都子氏所蔵の全丁のモノクロ写真と、蒲生美津子「早歌の音楽的研究」の口絵カラー写真によって内容を確認した。蒲生氏著書のカラー写真では、押界も見え、書誌は、蒲生氏著書に所収。

○京都大学文学部国語国文研究室蔵頼秋本

雅楽家豊原頼秋旧蔵本。原本未見。外村南都子氏所蔵写真によって確認した。書誌は、蒲生氏著書に所収。

これらの伝本と金春宗家本を比較するにあたり、外村久江『早歌の研究』、蒲生「早歌の音楽的研究」の記述を参考にしつつ、宴曲譜本の性質について、概説しておく。

宴曲の譜本は、冊子の形式で、詞章を一頁に五行書きとしているのが普通である。詞章以外に記載される事項は、以下のものである。

曲頭記……朱書き。曲の一番初めに甲・乙、または地として、音階を示す。

垂れ鍵……朱書き。音階になんらかの変化を与えたと考えられる記号。右下がりのものと、左下がりのものと、二種類ある。

朱譜……朱書き。詞章の右に「宮・商・角・徴・羽」の五音や、リズムに関する指示として「延曲」または、「延曲口伝在之」と注記する。また、以下斉唱であることを意味する、「助音」の文字。

墨譜……墨書きの記号。

ハカセ……詞章の各字の右のゴマ点。

拍子点……宴曲が扇で拍子を取りながら謡われていたことは、「七十一番職人尽歌合」に描かれる早歌うたひの姿でもわかる。拍子点は、扇をどこで打つかを示す。

* このほか、「宮・商・角・徴・羽」の五音や「上下」のしるしもある。

傍訓……詞章の漢字の左側につく。カタカナで書かれることが多い。

濁点……漢字・仮名・又は傍訓に「・」や「。」の朱点を付す。

簡略に述べたが、宴曲の譜本には、詞章のほかにも、こうしたものが記載される。ただし、すべての宴曲譜本にこれらがあるわけではなく、むしろ、これらすべてが完備されている本の方が少ない。本稿で取り上げる金春宗家本には、詞章以外に右のすべてが記載されており、これは、特筆すべきことである。

ちなみに、「宴曲集巻第一」の伝本では、大東急本は善本ではあるが、冒頭の「春」のみ、曲頭記、朱譜、墨譜を欠き、残り九曲には、すべての音楽表記、濁点、傍訓が付されている。

時雨亭文庫無署名本も、非常に善本で、曲頭記、垂れ鍵、朱譜、墨譜、傍訓、すべて揃っているが、濁点はない。

三千院本は、曲頭記、垂れ鍵、朱譜、墨譜を完備するが、傍訓と濁点はない。

頼秋本は、濁点がなく、「春」「春野遊」「夏」「秋」「月」は、音楽表記と傍訓はあり、「郭公」は朱譜を欠き、「秋興」「冬」「雪」は、詞章と傍訓のみある。

「宴曲集巻第一」の伝本の状況から考えても、金春宗家本のように詞章と音楽表記、傍訓、濁点を完備した本は、大変貴重である。これらの伝本を比較検討するにあたっては、音楽表記を精査する必要があるが、稿者は音楽学的な立場ではなく、書誌学的、国文学的な立場からの考察を行う。

i 金春宗家本の朱濁点について

右に述べたように、「宴曲集巻第一」の伝本の中で、濁点を記載するものは、金春宗家本の他には、大東急記念文庫本のみである。謡われる芸能の宿命として、濁点表記の有無は最重要事項の一つである。本項では、金春宗家本に記載された濁点をすべて、表にして、大東急本との比較を試みた。【表1】

大東急本は、一曲目「春」の濁点表記が三箇所しかないが、それを除いても、金春宗家本の方が、濁点が多い。

また、注目すべき点は、大東急本に濁点がある箇所には、金春宗家本にも濁点が付されており、両本の濁点の付された箇所が一致するというところである。金春宗家本に濁点がなく、大東急本にのみ濁点がある箇所は、次の通りである。

〈大東急本〉

(よみ)

「夏」

「げに待」

(げにまつ)

「かがり火や」

(かがりびや)

「郭公」

「立やすらひけむ」

(たち)

「賜めは不直」

(ふぢよく)

「秋」

「九月」

(ながつき)

「月」

「残月」

(ざんげつ)

「秋興」

「裏枯ぬれば」

(うらがれぬれば)

「雪」

「瑞を」

(ずいを)

である。「宴曲集巻第二」全体を比較してわずか八例である。「夏」の「かがりび」、「秋」の「月」「秋興」「雪」の事例は、金春宗家本が濁点を省略したとも考えられる。「夏」の「だちやすらひけむ」「郭公」の事例は、大東急本の誤りとも考えられる。

右の八つの例外よりも、ここでは残り二百箇所以上の大東急本の濁点表記(大東急本に付された濁点のうちの、95%)と、金春宗家本の濁点表記が一致する、という事実に着目したい。金春宗家本には濁点が付され、大東急本にはない場合を、すべて大東急本の濁点省略と考えると、ほぼ一定していた可能性も考えられるのではないだろうか。なかつた、各曲の清濁は、ほぼ一定していた可能性も考えられるのではないだろうか。

外村久江・外村南都子『早歌全詞集』は、底本の松通舎文庫旧蔵本岡不崩転写本を底本とし、江戸期書写本の中で濁点を有する諸本もあまえつつ、濁点を付している。また、外村南都子「早歌の〈正本〉について——新出の坂阿署名『宴曲集巻第四』の濁点を中心に——」においても、外村南都子氏所蔵の坂阿署名『宴曲集巻第四』の濁点と『早歌全詩集』の濁点(主として江戸期転写本の島原松平文庫本(甲)本を参考にしたということである。この本は、『早歌全詞集』刊行段階では唯一、全体に濁点が付された伝本であった)を比較検討しておられる。外村南都子氏の調査結果を見ると、坂阿本と松平(甲)本とは、濁点が一致する箇所と不一致の箇所とが混在するようである。本稿の調査結果が、『宴曲集巻第一』に限って言える結果であった可能性、金春宗家本と大東急本が同系統であったがゆえの一致であった可能性なども想定する必要があるかもしれないが、松平文庫本のように、詞章だけでなく音楽表記なども精緻に書写し

た江戸期写本でも、書写者が濁点を恣意的に付加している可能性を考慮する必要があるのではないだろうか。

先行研究において既に指摘されていることであるが、宴曲の詞章は、能やその他の文学作品とは異なり、諸本による著しい相違は見られない。諸本によって漢字や仮名遣いがまちまちであっても、耳で聞く際には諸本の異同がほとんどないということは、宴曲という歌謡の特色の一つである。その理由について、外村久江氏は、「早歌は歌うものであるから、一字・一句の差異に対しても厳密な注意がはらわれていて、成立の頃から、既に、僅な詞章の相違についても異説・両曲と称して区別し、それらを集めた「異説秘抄口伝巻」や「撰要両曲巻」という伝書ものこされているのである」（『早歌の研究』）と考えておられる。

清濁は、時には言葉の意味や解釈の相違をも生じさせるような、重要な事項である。それが、歌い手や伝本に節付を付ける者の解釈によってブレが生じるようなことは、この歌謡において、許されなかったのではないだろうか。もしそうしたブレが許される状況であれば、先の八つのように、金春家本と大東急本と濁点が食い違う事例は、もつと多かったはずである。

宴曲伝本は、実際に謡われていた時代のものが少なく、濁点を有する本となると、さらに少ない。「宴曲集巻第一」については、金春家本のような善本が出現し、同じく善本で濁点も有した大東急本の存在があったからこそ、濁点の比較検討が可能であったが、他の巻については、伝本の残存状況からして、そうした比較すらできないのが現状である。そのような現状の中で、本稿において、室町期書写の宴曲写本の濁点の比較検討が実現したことは、宴曲研究の一つの成果と考える。と同時に、謡われていた時代の宴曲という歌謡の一つ在り方の可能性を、ここに提示しておく。

ii 金春家本の朱書きについて

先にも述べたように、金春家本は、宴曲を謡う際に必要な、すべての音楽表記を完備した本である。本来であれば、すべての音楽表記を精査する必要があるが、稿者にはそれを行う見識はなく、墨譜の調査まで行き届かない。そこで、朱書き（曲頭記、垂れ鍵、助音・延曲の表記）について、他の室町期諸本と比較した。

まず、曲頭記について。蒲生氏『早歌の音楽的研究』によると、『宴曲集巻第一』の曲頭記は、諸本間の異同はないと報告されている。また、『冷泉家時雨亭叢書44 宴曲』の伊藤氏解題によると、巻によつては曲頭記に異同がある事例が挙げられている。金春家本の曲頭記を確認したところ、

「春」地 「花」欠損 「春野遊」甲 「夏」地
「郭公」乙 「秋」地 「月」甲 「秋興」乙

「冬」甲 「雪」地
となっており、曲頭記が欠損した「花」以外は、他の諸本と異同はない。

次に、垂れ鍵について。蒲生氏『早歌の音楽的研究』によると、垂れ鍵も諸本間の異同はないとされている。念のため、金春家本の垂れ鍵を確認したところ、諸本とほぼ一致するが、一箇所、「雪」のうち、「梅が枝に花ふりまかふ」の箇所には、垂れ鍵がない。これは、金春家本の誤脱の可能性もある。

斉唱の始まりを示す「助音」については、金春家本と諸本で異同はなく、すべて一致した。

金春家本の朱譜について、もう一つ、述べておく。宴曲の譜本は、能の謡本と同様、本文筆者と節付者は別である。金春家本の節付の朱譜は、宴曲の中興の祖である坂口盛勝坂阿の朱譜に、非常によく似ている。

現在所在が確認されている、坂口坂阿による節付本は、十一本ある。このうち、近年発見された、外村南都子氏所蔵『宴曲集巻第四』（応永二年十二月五日坂阿識語）の朱書きと、金春家本のそれを比較してみる。

〈坂阿本〉

地 助音 商・角



〈金春本〉



このように並べてみると、よく似ていることが、明瞭である。「地」の土偏の第三画が、左に出ず、「也」の縦棒があまり上に突き出ない、「助音」の「且」の字のかたち、「助」に比べて小さく「音」と書くかたち、「商」の字が横長につぶれているかたち、「角」のかたち第五画が特別長いこと、第一画と第二画を点のようにしていることなどが、類似点として挙げられる。

外村南都子氏のご厚意により、同氏ご所蔵の坂阿本を本稿に掲載させていただいたが、現存する十一本の坂阿本の朱書きは、いずれもこの書体である。

この特徴的な朱書きは、坂阿だけでなく、坂阿の子であり弟子でもある口阿にも受け継がれている。口阿の識語を有する宴曲譜本は、竜門文庫所蔵『宴曲拔華』であり、この一本のみが現在確認されている。口阿識語本『宴曲拔華』の朱書きを見ると、右

の坂阿の朱とやはり、酷似しているのである。識語のない宴曲譜本の中にも、右の特徴的な書体の朱書きが付された伝本があり（尊経閣文庫蔵広憶筆『宴曲抄下』など）、右の比較だけでは、金春宗家本を坂阿による節付本と比定することはできない。金春宗家本は、坂阿、口阿といった当時最も知られた宴曲の玄人による節付本である、ということだけは、言えるだろう。

先行研究において指摘されている坂阿、口阿父子の活躍時期は、おおよそ以下のようにとめることができる。

坂阿は生没年などの詳細は未詳であるが、延文二年（一三五七）に道阿から『異説秘抄』を相伝されている（尊経閣文庫本『異説秘抄口伝巻』識語）。そして、明徳二（一二三九）年頃から応永三年（一三九六）頃までの間に、現存の坂阿本の節付を施した。口阿は、貞和三年（一三四五）頃に生まれ、明徳三年（一三九二）に坂阿から『異説秘抄口伝巻』を相伝されている（尊経閣文庫本『異説秘抄口伝巻』識語）。永享八年（一四二六）に九十歳、文安年間（一四四四）頃に九十七、八歳ぐらいの長寿で没している。

金春宗家本の書写年代を「坂阿、口阿父子が活躍した時期」とすると、十四世紀半ばから十五世紀半ばの約百年間と、かなりの幅ができてしまう。もう少し、書写年代を限定するとすれば、冷泉家時雨亭文庫の一連の坂阿本が節付された、明徳二年頃から、口阿の没した文安頃までの間としておくべきか。

三、「今春太夫鎮喜」について

金春宗家本の識語は、元の識語の約二行分の文字を削り、その上から墨書されている。削除された内容は不明であるが、現存の宴曲譜本から推測すると、相伝者、被相伝者、相伝の年月などが記されていた可能性もある。

削除された部分に上書きされた、「今春太夫鎮喜《花押》」は、おそらく、所蔵者であることを意味する署名であろう。問題となるのは、今春太夫鎮喜がいつ頃の人物で、削除してその署名をしたのがいつか、ということである。『能楽源流考』や『金春古伝書集成』といった先行研究を確認しても、そのような名前の大夫は見当たらず、本稿を作成するにあたって、資料を調査してもみたが、成果は上がらなかった。

こうした状況で何かを書いても、それは、全くの仮定にすぎず、今後何か資料が見つかれば、訂正しなくてはならないものであるが、一応、現時点での稿者の見解を述べておく。

歴代の金春大夫は、表章・伊藤正義『金春古伝書集成』に詳細が報告されており、金春禪竹以後の大夫については、生没年や幼名といった、具体的な事項も判明している。もしも今春太夫鎮喜が、金春禪竹以後の大夫であるならば、『金春古伝書集成』編者が系図作成にあたって参照した三十七種の文献資料のいずれかに、記載がある可能

性が高い。にもかかわらず、記載がないとなると、今春太夫鎮喜は、禪竹以後の大夫が一時的に名乗った名前か、あるいは、禪竹以前の大夫、ということになる。

また、冒頭に掲げた世阿弥、禪竹、禪鳳の文献を見ても、世阿弥や禪竹は、自身も宴曲を謡い、宴曲に精通していたようであるが、永正十三年（一五一六）頃の禪鳳は「早歌・平語、又は諸衆の声明を聞候に……」と、宴曲を平曲や声明といった、その他の芸能全般の中の一つとしてとらえている様子であり、若年の頃はともかく、その頃の禪鳳自身は、宴曲を謡わなかったのかもしれない。世阿弥や禪竹の時代には、能役者も能だけでなく、多芸をこなせなければやっていけなかったようである。享徳三年（一四五四）前後の『応仁略記』の記事からも、そうした事情が伺える。

中にも御興宴と覚えしは。今次郎弥々若と呼ばれし童形。其親の音曲さる事なれば。早歌は定て歌らん。一曲と御所望有しに。「花見の御幸と聞えしは保安第五の衣更着」と歌ひ出す。一座の興宴公方（義政）御気色。其頃の褒美天下の沙汰此事なりき。

今次郎と弥々若が謡ったのは、『宴曲集巻第二』所収の「花」である。このような事例を考えても、金春宗家本のような、音楽表記や濁点を完備した宴曲譜本を必要としたのは、禪竹や禪竹以前の世代の金春大夫であつただろう。

先の書写年代を考慮し、禪竹が金春大夫氏信と名乗っていたことは確実であるから除外すると、「今春太夫鎮喜」は、禪竹の祖父である金春権守か、父の弥三郎あたりを想定することができる。

ちなみに、金春権守は至徳二年（一三八五）に興福寺禪定院での九条殿饗応猿楽に、金春大夫として出勤しており、金春弥三郎は翌至徳三年に金春大夫に任じられている。また、応永三十一（一四二四）年に、金春大夫が京都八条坊門にて勸進猿楽を行っているが、禪竹が大夫になった年代が応永三十五年以前（『六義』奥書）であることしかわからないため、応永三十一年の金春大夫が、弥三郎か禪竹か、比定できない。（以上、すべて『金春古伝書集成』の「金春三代略伝」「金春座略年譜」参照）。

以上は、禪竹以前の金春大夫関連資料が稀少な現状において立てた、稿者の仮説であつて、今後、禪竹以前の金春大夫の事情を知る手がかりが出現すれば、ただちに訂正されるべきものである。

四、おわりに

能と宴曲との関わりは、これまで作品研究の視点から論じられることの方が多かった。野村八良氏、香西精氏、伊藤正義氏、外村南都子氏、竹本幹夫氏ら先学は、宴曲が能の作品の主題として、また修辭の一部として影響を与えた可能性を指摘した。また、宴曲と能の音楽的な関連については、東儀鐵笛氏や横道萬里雄氏、蒲生美津子氏

らによって論じられている。⁽¹⁸⁾だが、能と宴曲との歴史的な関わりについては、資料が少なく、論じることが困難な状況であった。

しかし、今回、金春宗家安明氏によって、同家蔵『宴曲集卷第一』が発見されたことにより、能と宴曲との関わりを、我々はこれまで以上に考究する必要があると考えらる。

また、金春宗家蔵『宴曲集卷第一』は、宴曲譜本として見たときにも、音楽的表記を完備した善本であり、實際謡われていた頃の宴曲の在り方を知る上で、欠かせないものである。

本稿において、これほどの貴重資料を論じることができた喜びをかみしめるとともに、能と宴曲との関わり、室町期の宴曲のかたちの探究に、さらなる努力をしていきたい。

注(1) 吉田東伍「宴曲とは何ぞ」、『宴曲全集』早稲田大学出版、一九一七、所収)、外村久江「早歌関係史料」(『東京学芸大学紀要』第三部門 社会科学部第二十五集。昭和四十八年十月)

(2) 表章・月曜会編『世阿弥自筆能本集 校訂編』岩波書店、一九九七。

(3) 表章校注『申楽談儀』岩波文庫、一九六〇。

(4) 表章・伊藤正義校注『金春古伝書集成』わんや書店、一九六九。

(5) 永享八年(一四三六)正月廿八日の『看聞御記』の記事は、以下の通りである。

其後藤寿石阿等被召参。(中略)藤寿先施芸。吹尺八。歌一声。次打八撥。観世(猿楽)阿三人参。付名人也。笛鼓拍之。次コキリコ詠小歌舞。次白拍子舞。次平家語。次早歌。八撥コキリコ度々被打。其芸皆以神也妙也。感嘆無極

(6) 宴曲の諸本についての主な先行研究は、以下の六本である。

・吉田東伍「宴曲の諸本」(『宴曲全集』所収)

・新聞進一校注『中世近世歌謡集』の「諸本」の項(『日本古典文学大系44』岩波書店、一九五九、所収)

・外村久江「早歌十六冊伝本の研究」(『早歌の研究』至文堂、一九六五、所収)

・蒲生美津子「早歌諸譜本の書誌」(『早歌の音楽的研究』三省堂、一九八三)

・外村久江・外村南都子「早歌全詞集」(三弥井書店、一九九三)の「諸本について」の項。

・伊藤正義解説『冷泉家時雨亭叢書44 宴曲 上』(朝日新聞社、一九九六)の「五、宴曲の諸本」の項。

また、諸本の一部に関する先行研究には、野村八良書写本について考察した落合博志「常磐松文庫蔵早歌譜本解題」(『実践女子大学芸芸資料研究所年報』15号、一九九六年三月)があり、吉田東伍旧蔵宴曲資料についての報告は、拙稿「明治期における宴曲研究史——吉田文庫蔵宴曲資料をめぐって——」(『演劇映像』47号、

二〇〇六年三月)がある。

(7) 豊原頼秋は、雅楽家、天和六(一六二〇)元禄六(一六九三)。天王寺方蘭広瀬次男、養子。法名、頼秋院幽室日栄。(以上、蒲生「早歌の音楽的研究」による。)

(8) 外村南都子「早歌の『正本』について——新出の坂阿署名本『宴曲集』巻第四を中心——」(『国文白百合』36号、二〇〇五年三月)

(9) 金春宗家本翻刻末尾に付記した『本文校異』(濁点の校異)の項参照。

(10) 外村久江氏は先行研究において、『康富記』文安元年(一四四四)閏六月十一日付「松岡早歌三事 参会」という事例をあげ、早歌本文を書く専門の職人がいたことを指摘している。

(11) 現存する坂阿本十一本について、簡略に記す。

明徳二年七月廿五日 宴曲集三 (240×180) 冷泉家時雨亭文庫

十一月十五日 宴曲抄上 (255×175) 冷泉家時雨亭文庫

十二月十三日 宴曲抄中 (255×175) 冷泉家時雨亭文庫

明徳三年二月九日 宴曲抄下 (255×175) 冷泉家時雨亭文庫

六月一日 宛百集 (240×180) 冷泉家時雨亭文庫

十一月十五日 拾葉集上 (240×180) 冷泉家時雨亭文庫

応永元年八月廿二日 玉林苑下 (241×178) 冷泉家時雨亭文庫

応永二年十二月五日 宴曲集四 (258×172濁点有) 外村南都子氏

十二月十三日 宴曲抄上 (263×176濁点有) 京都府立総合資料館

応永三年四月五日 真曲抄 (250×170) 円徳寺

このほか、奥書はないが、内容から坂阿本に比定された「真曲抄」が、冷泉家時雨亭文庫に所蔵されている。

現存十一本の坂阿本のうち、円徳寺所蔵「真曲抄」(応永三年卯月五日坂阿識語。原本未見。外村南都子氏所蔵写真版にて内容を確認した。書誌は、蒲生氏著書による。)は、朱書きだけでなく、本文詞章の字体も酷似している。また、この本は、蒲生氏著書に記載された書誌によると、本の大きさも250耗×170耗で、金春宗家本(251耗×169耗)とはほぼ一致しており、原本を調査していないため速断はできないが、その関係性が懸念されるところである。

外村南都子氏所蔵「宴曲集巻第四」は、注8のほか、外村南都子・橋本裕規子・吉良裕美子・杉田良恵「翻刻」応永二年坂阿署名「宴曲集巻第四」(『言語・文学研究論集』第五号、二〇〇五年三月)に書誌ならびに全文翻刻が掲載されている。貴重な資料を閲覧、掲載をご許可いただき、御礼を申し上げます。

京都府立総合資料館蔵「宴曲抄上」については、京都府立総合資料館のHPの「貴重書データベース」(<http://www3.library.pref.kyoto.jp/>)に全丁のカラー写真がアップされている(二〇〇六年九月現在)。

(12) 川瀬一馬監修「龍門文庫善本叢刊第九巻」阪本龍門文庫、一九八七。

(13) 尊経閣文庫本「異説秘抄口伝巻」識語

於当道為秘説 但坂口平三盛勝音曲五音達者極與蹟上者 此卷令相伝者也

干時延文第二層無射下句之比以正本書寫之

沙弥道阿在判

(14) 尊經閣文庫本『異説秘抄口伝卷』識語

此卷雖為秘説 平盛幸令相伝者也

明徳三年六月一日

沙弥坂阿在判

(15) 龍門文庫本『宴曲技華』

永享八年(一四三二)卯月五日

坂口左京亮平盛幸

九十歳口阿(花押)

なお、口阿が九十七、八歳の長寿で没したという記事が、心敬「ひとり言」にあることを外村久江氏が指摘している。

(16) 外村氏は、今次郎弥々若の親を猿楽役者と、今次郎、弥々若を猿楽役者の子供と推定した。幼年期に今次郎、弥々若と名乗った猿楽役者を、資料で確認することはできない。だが、足利義政に召し出されるほどの寵愛を受け、「親の音曲」も知れ渡っていた、さらに資料の文面からすると、その親は早歌以外の道の者のようであるから、そうなると、猿楽役者の可能性は濃厚であろう。

(17) 野村八良「謡曲の文句」(『能楽』六卷八号明治四十一年八月号)、香西精「作者と本説」(『能謡新考』檜書店、一九七二)伊藤正義校注『謡曲集』新潮社、一九八三、一九八八、外村南都子「早歌の心情と表現」三弥井書店、二〇〇五、竹本幹夫「琳阿考―南北朝期曲舞作者の横顔―」(『芸能史研究』五十三卷、一九七六年四月)ほか。

(18) 東儀鐵笛「宴曲の研究的復活」(『宴曲全集』)、横道萬里雄「早歌の新旧」(『能劇の研究』岩波書店、一九八六)、蒲生「早歌の音楽的研究」ほか。

【付記】 本稿作成にあたり、貴重資料の閲覧調査ならびに掲載をご許可いただいた、前金春

宗家金春信高先生、金春宗家安明先生に、心から感謝を申し上げます。

【書誌】

【所蔵】 金春宗家

【形態】 写本、一冊

【時代】 〈室町中後期〉

【寸法】 縦二五・一糎×横一六・九糎

【表紙】 薄茶色表紙。わずかに雲母が残る。押八双。

【外題】 ナシ

【内題】 宴曲集卷第一 四季部

【料紙】 斐紙

【装丁】 綴帖装

【丁数】 目録二丁、本文三二丁。最終丁を切除した跡がある。

【識語】 金春太夫／秦鎮喜《花押》

【凡例】 ……基本的に、『早歌全詞集』の凡例に準ずる。

・底本には句説点はないが、本曲については句と句の間を一字あけた。

・本曲の仮名遣いは、底本の通りにした。

・ふりがなは、底本は本文の左に片仮名で付けてあるが、右に付けた。

・濁点は、底本は漢字・ひらがなの左、またはふりが名の右に単点で付されているが、漢字の濁点は、ひらがなの濁点は濁点のあるひらがな、ふりがなの濁点は濁点のあるカタカナで翻刻した。

例 春風 うぐひす閑にて

・底本の異体字などは、通用の漢字に改めた。

・欠損で判読不能な箇所は□とした。

【翻刻】

宴曲集卷第一四季部

春

花

春野遊

夏

郭公

秋

月

秋興

冬

雪

春

霞たなびく雲井より 春立けりな天の戸の (動き) 明る気色も閑にて うぐひす□そふ
春風 霞むとすれどあは雪の 下草は尚結ばれて 岩間の氷解やらす 争か春のこえつら
む なるの関の東□ そよあまほしきは梅が香を 桜の花に匂はせて 柳が枝に発て
しがな 百千鳥木伝へば己が羽風にも 乱ぬべき物をな 誰に負てか 鳴音も絶せざるら
む 八重款冬 紫深き藤並 汀になびく池の面 取々にぞやおほゆる しるてや手折まし
折でやかざ、ましやな 三月の永き春日も なをあかなくに暮しつ

花

春は義木の徳有て 名を顕せる桜□李 (動き) 花の中にも勝たる 紅桜糸桜 初花桜さけ
るより 梢にかゝる白雲 花の所の名高きは 石崇が住し金谷園 鈿山の辺の錦繡谷 我
朝の芳野山 龍田泊瀬志賀の山 奈良の都の八重桜 大内山の花桜 雲居の桜をかざすな
臨時の祭の舞人 鎮花□祭は 勝佐波 神の恵み憑敷 去来穂別の天皇の 稚桜の宮
の花の盃 淳和の御門の花の宴 天長八年の春也 花見の御幸と聞えしは 保安第五の
二月 万代の様をば 花にぞとめし白河 瓶に差たる花を見て 物思なしや老の春 今日も
来ずと恨しは 雪と降り庭の花 楊貴妃がかほばせ 雨を帯たる花の枝 源氏の紫の上 霞
の中の榊桜催馬楽の桜人 双調には柳花苑 花山の遍□僧正 花園の左大臣とかや 花色
衣花染 花薄様花筐 霊山説法の場には 四種曼荼の花ぞふる 法華に喻し優曇花 いか
なる句なるらむ 愛賢御代なれば あゝ風も枝を鳴さず 千年の春ぞ閑

春野遊

上陽の春の野遊の曲 紅錦をさらす春日影 (動き) 閑き風にや匂らん 霞に漏る花の香 花に
鳴ては木伝鶯は 誰が家の軒端にか 珠簾いまだ巻さるに 夢の枕に音□て 人來と客
をよぶとかや 台頭に酒有て 酔をす、むる砌に 炬下に羹を和る□ 野沢に求し会遇の
若菜 折手にたまる早蕨 土筆と書るは土筆 長安の薺の青色 田中の井戸に引田莉 阿子
女よいかに認来かし 記念に袖を通つ、 摘しらせばやとぞおもふ うつろふ情の色しあら
ば 花の下に帰らん事をや忘るらん 遊糸線乱の色々 碧羅の天になびくなり 糸を宛て

夏

花は根に鳥は旧巢にや帰らむ (動き) 惜し物□桜色に 染しは花の袂を 此いつしか更は □
ぬに着たる夏衣 卯花さける玉河の 井□にかゝる白波 二葉に見えし蕤草 御生の比や栄
ん 勝待初音もめづらしき郭公 雲居のよその一声を おもひもあえず詠れば つれなくの
こる在明 水位勝りぬや五月雨に 荷手もたゆき河長の 菖蒲はもらぬ軒端にも 蕤屋や
萱屋板廂 何もかはらざりけり 外面の木陰露すし 一村過る夕立に 水まさらざらめ
や 鵜飼舟堂や篝 篝火や螢に紛ふ夕闇夜 今夜ばかりや六月の 名残もおしき木綿祓 麻の
末葉に通ふや秋の初風

郭公

緑松の陰の下 紫藤の露の底 (動き) 胡蝶も霞に遠避 溪鳥も雲に入ぬれば 待る物とは我
宿に 来向空の郭公 程時過す聞ばやと おもふ心やさそひけむ 其神山の以往 其神館
に 立やすらひけむ片岡の 漏て初音ぞ珍き 四五月の際の 端山の峯の雲の外 二三更
の間の 夢の直の雨の後 枝には露を帯つ、 金鈴離々と房 花は艶を施して 紫麝粉々
と芳しき 廬橘の香をとめて 鳴は昔や忍ばる、 有つる垣根の同声に したひ来にける
愛は さすがに人には殊なりや 花散里の郭公 待日は聞ず日比経て 今夜聞つと読りし
は 音羽の山の郭公 鳴つる方を詠れば 只在明の月影の つれなき人の梢より なく音
空なる恋わびて 心の中をかきくとき 岩瀬の森の郭公 妻来しは いかなる世の事なり
けん 舎が父なれどうぐひすは 賤き垣根に木伝て 玉錦庭にはをとづれず 然而一声
の山鳥は 夜となく昼となく 聞ん事を松の戸に 明方かけてや名調らん 木の丸殿の
曉 鶯の卵の中より巢立とも 藍より青き声有は 只郭公鳥のみならず 履手乞ては何か
せむ 賜めが不直を顕はす 五常の中の信有は 布穀に過たる鳥ぞなき 何の田長ぞ名もし

るく 己鳴ては早苗取 唐は田にたつ宮に 賑わたる君が代の 勝治れる時の鳥 ねざめ
の空の急雨に 袖に涙の色染て 人の恋敷常葉山 唐紅に振出て 鳴は我身の類かと 露
けき程の五月雨に 茂きあやめに水こえて 文目も見えぬ夜の浪に 御舟をとめし淀の
渡 未夜深きにと詠しは いかなる舟の中ならん おぼつかなしや鞍橋山 山路暮しつ往や
らで 只一声のあやなくも やがて明ぬるしの、めの 信田の杜の千枝の数 聞ても飽ぬ名
残は 何も初音の郭公 紀伊路の遠山廻つ 今來の岡にぞ待るなる 聞でも杉の村立を 是
所を詮にせむ山田の原 又百千帰信濃なる 須賀の荒野に鳴比や 声六月の郭公

秋

取し早苗の何の間に 稲葉の鳴子引替て (助意) 秋風吹は七夕の 妻迎船に契てや 時しも
声を頭揚て 雲居を渡る雁金 遠の山路や霧籠て 友迷はせる旅人は 過ぎぬ秋や悪から
む 露分わぶるしの、め 春は緑に見えし若草の 花は野辺に紅葉は峯に 彩る露の玉由良
も 日影を待得ざりけるは 垣面に伝檣 古枝にさける本荒の 小萩が花荵 女郎花
薄 風にまねく夕眼暮 得ぞ過やられざりける 同雲居のなどやらむ 七月八月九月に成
ば 久堅の月の都に光ぞさやけかりける 賤土が仮寝の稲庭 鹿早の音に驚かされて 驚か
すなんなる物をな 山田の打木のねざめは 此夜や寒からむ 綴差となく蛭 いかはすすべ
き暮る秋の 名残を慕袂よりや 先は時雨初らんやな

月

更閑夜閑にして 清明たる月の夜 (助意) 明月峽の晩 庾公が樓に上れば 千里に月明かな
り 残月窓に傾て 宮漏正に長ければ 打や砧の万声 千度ねざめの床の上に 掃もあえ
ぬ露霜を 片敷袖にやをさそへん 月冷く風秋なり 此和琴ゆるく調て 潭月に望のみなら
じ 索々たる絃の響 松の嵐も通來て 深ては寒霜夜の月を 緋山に送なり 瀧水氷咽
で 流る、事をや得ざるらむ 月の出塩のや 御津の浜松の 下枝をあらふ浪の 波間にう
かぶ白妙の 月や砂を照すらむ 月は明石の浦の栖居 真木の戸口の月影 とはす語の夢も
勝 忘ぬ節とや成ぬらむ 去來見に行ん佐良科や 娘捨山清見が関 広沢住の江難波濁 葦
間に宿る夜半の月 仰げば清久堅の 月の都は九重の 雲の梯に澄渡 露台の月の晨明 月

花門の夕月夜 秋の宮人の袖の上に うつろふ萩が花ざり 露もさながら色々の 玉かとみ
ゆる月影 不知夜弓張臥待の月 朧に霞三日月

秋興

蕭颯たる涼風 一時の秋を告とかや (助意) 槐花雨に潤ふ 桐葉風すし 林を飾紅葉 緑苔
をはらふ持成 是皆秋の興を増て 色々にみゆる百種千種の花の下紐 はや解そむる糸萩
に 乱て結白露 薄霧の立旅衣の 袖かともがふ初尾花 分行末の遙々と 風にきけば妻こ
めに 男鹿鳴野の真意原 末枯ぬれば虫の音も 絶々よはる夕暮 よしさらば今夜はこゝに
宿りたらむ 男山花に他名は立ぬとも 我脱かけん蘭 閑麗たてる女郎花 勝そもえなら
ぬ色なれば 辺の草のゆかりまでも 心をかる、夕露の 手枕寒かりねの床 第一に心を
傷る 何の処にか最たる 月の明らかなる前 夜始て長ければ 歌々たる星河の曙とする
晩 壁に背灯の 幽に残窓中

冬

今日よりは間無時雨の 間無時雨の布留の神杉や 年旧ぬれど (助意) 染あえなくに なを
緑に三輪の山本 嵐や過て吹ぬらん わづかにのこる紅葉々 霜に枯行浅茅生の 宿には
人もとひこず 板井の水も水草居て 氷の上に霰ふり 小野の山里雪深し 跡だに見えぬ
細道 春の隣の近ければ 老木は花もうらやまし 厭ても厭方ぞなき 来老らくの関守 さ
ても仏名に成ぬれば 三千世界恒河沙如来 諸仏菩薩受持名号 功德無量無辺引摂 濃敷ぞ
やおぼゆる 立舞袖もいそがはし 追儼の夜半の宮人

雪

瑞を豊年に頭はす 尺に満白雪の 降て暮行歳月の (助意) 積々てもつるに紅葉ぬ松が枝
の 緑も深き春來れば 雪間を分る若草 はつかにおもふ心は愛人の 末の松山浪こす
かと みゆる浦近く降來る雪 雪の光に明る山の 尾上の里の里人は 人目行跡なき庭
にとはぬを情をおもへども なをうらめしくや待るらむ 遠司徒が家の雪も 春過夏深
く つもりて道はまよはず 瑤階を連る庭の雪 瓊樹を抽る林の雪は 此一万株の花ほころ

び 梅が枝に花ふりまがふあは雪 うぐひすの百囀すれども尚風まぜの春の雪は 班女が
闇の裏には 秋の扇の色と成 孫康が窓には 雪を集めて光とす 朝に跡を尋しは 雪の中
のつなが 駒とかや 夕に鳥立にまよふ雪も 白文に見ゆる箸鷹 鶴鶴あざやかなるを奪
れ 白鵬は白きを失ふ 抑善政曇らぬ御代に 会がたのしき九重の 豊の明の小忌衣 袖
振雪はなを冴て 日影にさえぬ玉敷の 御籬にたえぬ御溝水 汀の水峯の雪 君にぞ迷ふ
道はまよはずと誣ても けなば消ぬべき命の なを又世に経る白雪に 市の南に望し売炭翁
は さゆる一尺の雪を悦ぶおもひ有 我宿の薄おしな 降雪は 世々に継ても 跡たえじと
ぞや覚

金春太夫

秦鎮喜《花押》

【本文校異】

本文の校異は、便宜的に『早歌全詞集』との比較にとどめた。漢字の当て字や仮名遣いの違いを除き、音で聞いたときの本文の異同は、七箇所あった。また、その七箇所についてのみ、他の室町期写本との照合を行った。

(※)を付したものは、金春宗家本単独の異同で、他の室町期写本にはない事例である。これは金春宗家本の本文書写の際のケアレミスとみなしうるであろう。

〔金春宗家本〕

【早歌全詞集】

〔春野遊〕

霞に漏る花の香

霞に漏る花の香

〔夏〕

蛩に紛々闇夜(※)

蛩にまがふ夕やみ

〔郭公〕

紀伊路の遠山(※)

紀路の遠山

〔秋〕

遠の山路

遠の山路

〔秋興〕

乱て(※)

みだれて

傷る(※)

傷むる

〔雪〕

一万株の

一万株の

【濁点の校異】

室町期書写の『宴曲集巻第一』のうち、濁点が付されたものは、金春宗家本、大東急本の二本のみである。両本の濁点の有無が一致している箇所のうち、『早歌全詞集』の濁点表記と異なる箇所は、以下の通りである。なお、金春宗家本にのみ濁点があり、大東急本にはない場合は、(※)としたが、濁点表記についての稿で述べたように、大東急本に濁点がない場合でも、実際には濁って発音していた可能性がある。

〔金春宗家本・大東急本〕

【早歌全詞集】

〔春〕

岩間の氷解やらす

岩間の氷解やらす

〔花〕

去来穂別の天皇の

いざ穂分の天皇の

花染

花染

〔春野遊〕

名残の袖はしほるとも(※)

名残の袖はしほるとも

〔夏〕

夕立

夕立

〔郭公〕

程時過ぎず

程時過ぎず

卵の中より(※)

卵の中より

巢立ども(※)

巢立ども

履手乞ては(※)

履手乞ては

〔秋〕

旅人は

旅人は

女郎花(※)

女郎花

「月」

のみならじ

絃の（※）

露台の

うつろふ萩

不知夜（※）

「秋興」

薄霧の

「冬」

嵐や過て

仙名に

のみならし

絃の

露台の

うつろふ萩

いさ宵

薄霧の

嵐やよきて

仙名に

【表1】

春

金春本	大東急本
霞たなびく	
閑にて	
うぐひす	
春風	
霞むとすれど	
結ばをれて	
争か	
東□	
梅が香	
柳が枝	
発てしがな	
百千鳥	も、千どり
木伝へば	
己が羽風にも	おのが羽かせにも
乱ぬべき	
絶せざるらむ	絶せざるらん
款冬	
藤並	
汀になびく	
取々にぞやおほゆる	
折でや	
かざ、ましやな	
永き春日	
金春本	大東急本
義木の	義木の
勝たる	勝れ

紅な桜	
糸桜	いと桜
初花桜	はつ花桜
梢	
石崇が	石崇が
我朝の	
志賀の山	
八重桜	八重桜
花桜	花桜
かざすなる	かざすなる
臨時	
舞人	
鎮花	
勝佐波	けにさば
恵ぞ	恵ぞ
稚桜	わか桜
盃	
御門	御門
御幸	
保安第五の二月	保安第五の二月
万代の	万代の
様をば	
花にぞ	花にぞ
今日も来すと	けふもこず
楊貴妃	
がかほはせ	がかほはせ
帯たる	おびたる
枝	
源氏の	源氏の

早蕨	会遇	野沢	砌に	よぶとかや	巻ざるに	いまだ	軒端	誰が家の	木伝鶯	閑き風	春日影	金春本	春野遊	閑	春ぞ	風も枝を鳴さず	御代なれば	優曇花	曼荼の花ぞふる	霊山	花筐	花色衣	左大臣	花園の	遍口僧正	双調	桜人	催馬楽の	樺桜
		野沢	みぎりに	よぶとかや		いまだ	軒葉		木伝ふうぐひすは	のとけき		大東急本		のとけき		風も枝をならさず		優曇花	曼荼の花ぞふる		はながたみ	花色衣	左大臣		遍昭	桜人		かは桜	

夕ぐれ	夕暮	露分衣	芝生の	しほるとも	名残の袖は	壺重	尋入野の	宿とらむ	夕煙	雄	桜狩	志賀の山こえ	いざ	都人	一木が本	山鳥	飽でぞ	永日	宛ては	なびくなり	色しあらば	摘しらせばやとぞ	袖	引田和	井戸	薺	土筆	土筆
		露分衣				つばすみれ		やどりとらむ			桜がり	志賀の山こえ		みやこ人	一木が		あかでぞ	ながき日		なびくなり	色しあらば	つみしらねばや		井戸		土筆	土筆	

金春本	郭公	初風はつかぜ	麻の末葉	木綿祓	名残も	六月の	ばかりや	紛	簀火や	簀舟	水まさらざらめや	一村過る	木陰露すし	かはらざりけり	何も	板廂	軒端	五月雨	詠れば	おもひもあえず	めづらしき郭公	勝待	葵草	二葉	玉河	夏衣	金春本	夏
大東急本		あさのすゑ葉に	夕ばらへ		名残も	みなづき		まがふ	(★)	かゝり かゝり火や	水まさらざらめや	水まさらざらめや	木陰露すし	かはらざりけり	いづれも	板びさし	軒葉	五月雨	ながむれば		めづらしき時鳥	げに待(★)		二葉	玉川	夏衣	大東急本	

月影の	只在明の	詠れば	郭公	日比経て	聞す	郭公	さすがに	同声	忍はる、	蘆橋の	芳しき	紫麝粉々	施して	帯	枝には	直の	間の	二三更	初音ぞ珍き	立	神館に	やと	程時過す聞ばやと	郭公	我宿	入ぬれば	遠避	陰の下
	たゞ在明の			日頃経て			さすがに		おなじこゑ	しのばる、	花たちはなの	かうばしき	芝麝粉々	帯	枝には	たゞちの		二三更		立(★)	かうだちに		ほど、き過すきかは	時鳥	我やど	いりぬれば	とをさかり	

梢より	梢より
恋わびて	
かきくどき	かきくどき
郭公	
舎が父なれど	しやがち、なれと
うぐひすは	うぐひすは
木伝て	音信ず
をとつれず	あけがた
明方	丸殿
丸殿	
鶯の卵の	
巢立とも	
只	たゞ
履手	
賜めが不直	賜めは不直(★)
五常	五常
過たる鳥ぞなき	
何の	いづくの
田長ぞ	
賑わたる君が代	
勝治れる	げにおさまれる
ねざめの	ねざめの
袖に涙の	
振出て	ふりいで、
我身の	
類か	たぐひか
程の五月雨	程の五月雨
茂き	
水こえて	水こえて
とゞめし淀の	

未夜深き	
詠しは	
おぼつかなし	
山路暮しつ	
往やうで	
只一聲の	
やがて	
信田の杜	
数々	
名残は	
郭公	
紀伊路	
廻つ	
岡にぞ	
聞でも杉の	聞かでも杉の
山田	山田
須賀の	すがの
六月の郭公	
秋	
金春本	大東急本
稲葉	
秋風吹は七夕の	
迎船に契てや	
顕揚て	
雁金	雁がね
旅人は	旅人は
過ぎぬ	
露分わぶる	
緑に	
野辺に	野べに

紅葉は	
彩る	色どる
日影を	
待得ざりける	あさがほ
僅	
小萩が	
女郎花	
花薄	はなすゝき
夕眼暮	
得ぞ	過ぎ
過やられ	過やられ
ざりける	
同	
などやらむ	などやらん
九月	九月(★)
成ば	
光ぞ	光ぞ
賤土が	しづが
驚かされて	おどろかされて
驚かす	
山田	山田
ねざめは	
綴差と	つゞりさせ
蚕	
いかゞは	いかゞは
すべき	
名残	
先は時雨	先は時雨
月	
金春本	大東急本

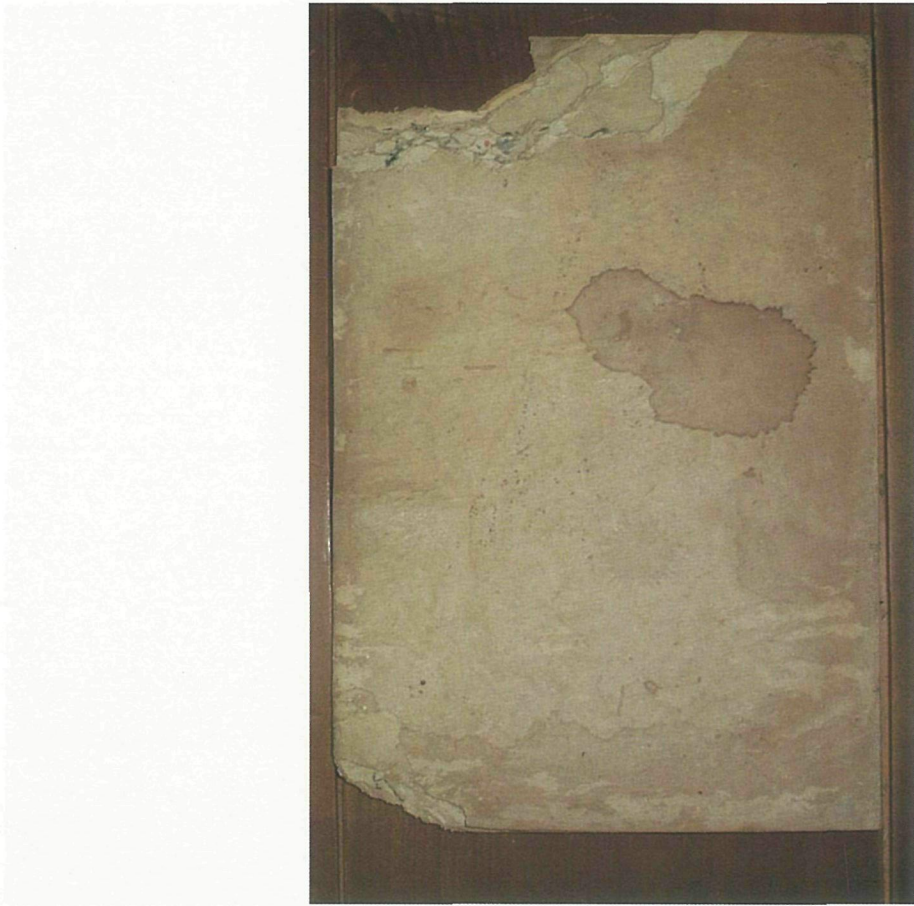
閑に	閑に
明月峽	明月峽
庾公が楼	庾公が楼
上れば	
残月	残月(★)
窓に傾て	窓に傾て
長ければ	長ければ
万声	
千度	
ねざめ	ね覚
袖	袖
月冷く・風秋なり	
和琴	
調て	
潭月	潭月
望	
のみならじ	のみならじ
絃の	
響	響
縦山	寒山に
咽で	
流る、	
得ざるらむ	
出塩	
下枝	しづ枝
うかぶ	
砂	砂
戸口	戸口
月影	月かげ
とはず語の夢も勝	問はず語の夢もげに

去来 <small>イザ</small>	いざ
姨捨山清見が <small>アサキミ</small>	
難波 <small>ナニバ</small>	難波がた <small>ナニバガタ</small>
宿る <small>ヤド</small>	やどる
仰げば <small>アツ</small>	仰げば <small>アツ</small>
月花門の夕月夜 <small>グツクハシノユヅクヨ</small>	月花門の夕月夜 <small>グツクハシノユヅクヨ</small>
宮人の袖 <small>ミヤヒトノソデ</small>	宮人の袖 <small>ミヤヒトノソデ</small>
萩が花 <small>ハキガハナ</small>	萩が花 <small>ハキガハナ</small>
さながら <small>サナガラ</small>	さながら <small>サナガラ</small>
月影 <small>ツキカゲ</small>	月影 <small>ツキカゲ</small>
不知夜 <small>イサヨヒ</small>	
朧 <small>ロウ</small>	
三日月 <small>ミカヅキ</small>	三日月 <small>ミカヅキ</small>
秋興 <small>アキキョウ</small>	
金春本 <small>キンシュンホン</small>	大東急本 <small>ダイトウキツホン</small>
告とかや <small>ツグとかや</small>	告とかや <small>ツグとかや</small>
風す <small>カゼス</small>	風す <small>カゼス</small>
飾 <small>カザル</small>	飾 <small>カザル</small>
糸萩に <small>イトハギニ</small>	
結白露 <small>ムスシロユ</small>	結白露 <small>ムスシロユ</small>
旅衣 <small>リョウイ</small>	旅衣 <small>リョウイ</small>
袖かとまがふ <small>ソデカトマガフ</small>	
初尾花 <small>ハツビタ</small>	
遙々と <small>ハルハル</small>	はる／＼と
風にきけば <small>カゼニキケバ</small>	ほのかにきけば
妻ごめに <small>ツマゴメニ</small>	
真葛原 <small>マクサハラ</small>	まく／＼原 <small>マク／＼ハラ</small>
末枯ぬれば <small>マツカレヌレバ</small>	裏枯ぬれば <small>ウラカレヌレバ</small>
絶々 <small>ツバツバ</small>	たえ／＼
夕暮 <small>ユフケ</small>	夕暮 <small>ユフケ</small>
さらば	さらば

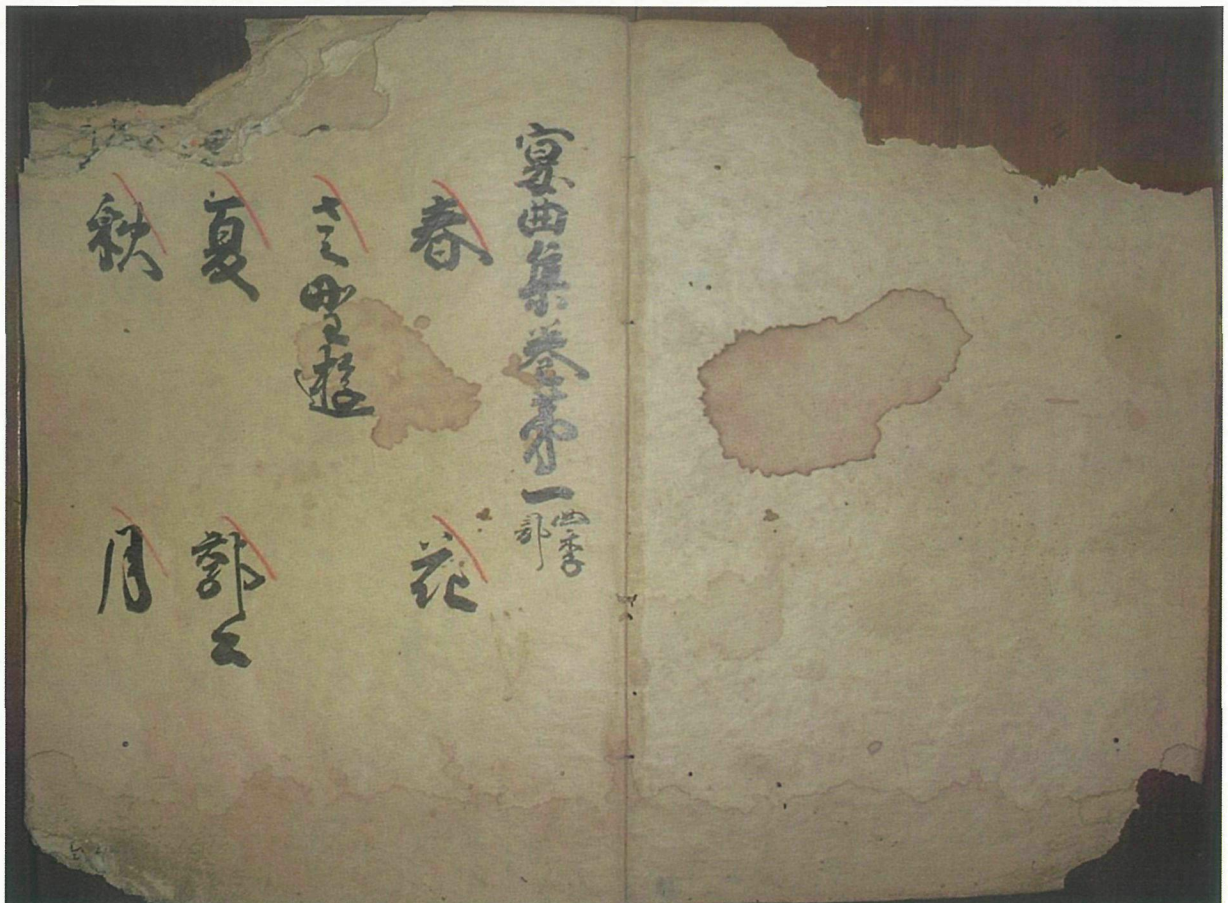
宿り <small>ヤド</small>	やどり
他名 <small>タナ</small>	あだ名
脱かけん <small>ツグナカケン</small>	ぬぎかけん <small>ヌギカケン</small>
女郎花 <small>ヨウナガハナ</small>	女郎花 <small>ヨウナガハナ</small>
勝 <small>カチ</small>	
色なれば <small>イロナレバ</small>	色なれば <small>イロナレバ</small>
までも <small>マデモ</small>	までも <small>マデモ</small>
第一に <small>ダイイチニ</small>	
何の <small>ナニノ</small>	何の <small>ナニノ</small>
最たる <small>モトメタル</small>	勝たる <small>カチタル</small>
夜始て長ければ <small>ヨハシテナガクレバ</small>	夜始て長ければ <small>ヨハシテナガクレバ</small>
壁に <small>カベニ</small>	壁に <small>カベニ</small>
灯の <small>アキラ</small>	燈の <small>アキラ</small>
窓中 <small>マドナカ</small>	窓のうち <small>マドノウチ</small>
冬 <small>フユ</small>	
金春本 <small>キンシュンホン</small>	大東急本 <small>ダイトウキツホン</small>
時雨の <small>シグレ</small>	時雨の <small>シグレ</small>
時雨の <small>シグレ</small>	時雨の <small>シグレ</small>
袖杉や <small>ソデスギヤ</small>	
年旧ぬれど <small>トシフルヌレド</small>	年旧ぬれど <small>トシフルヌレド</small>
緑に <small>キナンド</small>	みどりに
過ぎて <small>スギテ</small>	よぎて
わづかに <small>ワズカニ</small>	
紅葉々 <small>モミジバ</small>	紅葉は <small>モミジハ</small>
浅茅生の <small>アサチヲノ</small>	
宿には <small>ヤドニハ</small>	やどには
とひこず <small>トヒコズ</small>	問こず <small>トモコズ</small>
板井の水 <small>イタヱノミヅ</small>	板井の水 <small>イタヱノミヅ</small>
山里 <small>サンリ</small>	山ざと
跡だに <small>アトダニ</small>	跡だに <small>アトダニ</small>
近ければ <small>チカクレバ</small>	ちかければ

厭方ぞ <small>イフカタゾ</small>	いとふ方ぞ <small>イトフカタゾ</small>
成ぬれば <small>ナリヌレバ</small>	成ぬれば <small>ナリヌレバ</small>
三千世界 <small>サンザンセカイ</small>	
諸仏菩薩受持 <small>ショブツボサツサウジ</small>	
名号 <small>ミナウガウ</small>	名号 <small>ミナウガウ</small>
功德無量無辺引撰 <small>クツデムリヤウムヘンインセン</small>	
憑敷ぞや <small>タシラフゾヤ</small>	憑敷ぞや <small>タシラフゾヤ</small>
おほゆる <small>オホユル</small>	
袖もいそがはし <small>ソデモイソガハシ</small>	袖もいそがはし <small>ソデモイソガハシ</small>
宮人 <small>ミヤヒト</small>	宮人 <small>ミヤヒト</small>
雪 <small>ユキ</small>	
金春本 <small>キンシュンホン</small>	大東急本 <small>ダイトウキツホン</small>
瑞を <small>ミズメ</small>	瑞を <small>ミズメ</small>
紅葉ぬ松が枝の <small>モミジヌマツガエノ</small>	紅葉ぬ松がえの <small>モミジヌマツガエノ</small>
緑も <small>キナンド</small>	緑も <small>キナンド</small>
来れば <small>キレバ</small>	くれば
里人は <small>サトヒトハ</small>	さと人は
おもへども <small>オモヘドモ</small>	思へども <small>オモヘドモ</small>
遠司徒が <small>エンシタガ</small>	遠司徒が <small>エンシタガ</small>
春過 <small>ハルワタリ</small>	
まよはず <small>マヨハズ</small>	迷ず <small>マヨハズ</small>
抽る <small>ヒキス</small>	
一万株の <small>イチマンサダノ</small>	一万株の <small>イチマンサダノ</small>
花ほころび <small>ハナホコロビ</small>	花綻 <small>ハナハコロビ</small>
梅が枝 <small>ウメガエ</small>	梅がえ <small>ウメガエ</small>
まがふ <small>マガフ</small>	まがふ <small>マガフ</small>
うぐひすの <small>ウグハスノ</small>	鶯の <small>ウグハスノ</small>
百轉すれども <small>ヒャクテンスレドモ</small>	百轉すれども <small>ヒャクテンスレドモ</small>
風の <small>カゼ</small>	風の <small>カゼ</small>
まぜの	

班女 <small>ハヤメ</small>	班女 <small>ハヤメ</small>
扇の色 <small>アウエノイロ</small>	
孫康が <small>マコノカミ</small>	
窓 <small>マド</small>	窓 <small>マド</small>
尋しは <small>タシシハ</small>	尋しは <small>タシシハ</small>
つながぬ <small>ツナガヌ</small>	つながぬ <small>ツナガヌ</small>
夕に鳥立 <small>ユフニトリタテ</small>	夕に鳥立 <small>ユフニトリタテ</small>
あざやかなるを <small>アザヤカナルヲ</small>	鮮かなるを <small>アザヤカナルヲ</small>
奪れ <small>ウバワレ</small>	奪れ <small>ウバワレ</small>
善政 <small>ゼンセイ</small>	善政 <small>ゼンセイ</small>
会が <small>アヒガ</small>	
小忌衣 <small>コモロモ</small>	おみ衣 <small>オミモ</small>
袖振 <small>ソデフリ</small>	袖ふる <small>ソデフル</small>
日影に <small>ヒカゲニ</small>	日景 <small>ヒカゲ</small>
玉敷の <small>タマシキ</small>	
御溝水 <small>ミヅノミヅ</small>	御河水 <small>ミヅノミヅ</small>
汀の <small>ミヅノミヅ</small>	
君にぞ <small>キミニゾ</small>	君にぞ <small>キミニゾ</small>
まよはず <small>マヨハズ</small>	迷ず <small>マヨハズ</small>
けなば消ぬべき <small>ケナバシユヌベシ</small>	けなばけぬへき <small>ケナバシユヌベシ</small>
望し売 <small>ノゾミシバイ</small>	のぞみし売 <small>ノゾミシバイ</small>
悦ぶ <small>ユエボ</small>	悦ぶ <small>ユエボ</small>
我宿 <small>ワカド</small>	わがやど
継ても <small>ツギテモ</small>	つぎても
跡たえし <small>アトタエシ</small>	
とぞや <small>トゾヤ</small>	とぞや <small>トゾヤ</small>
覚 <small>サト</small>	

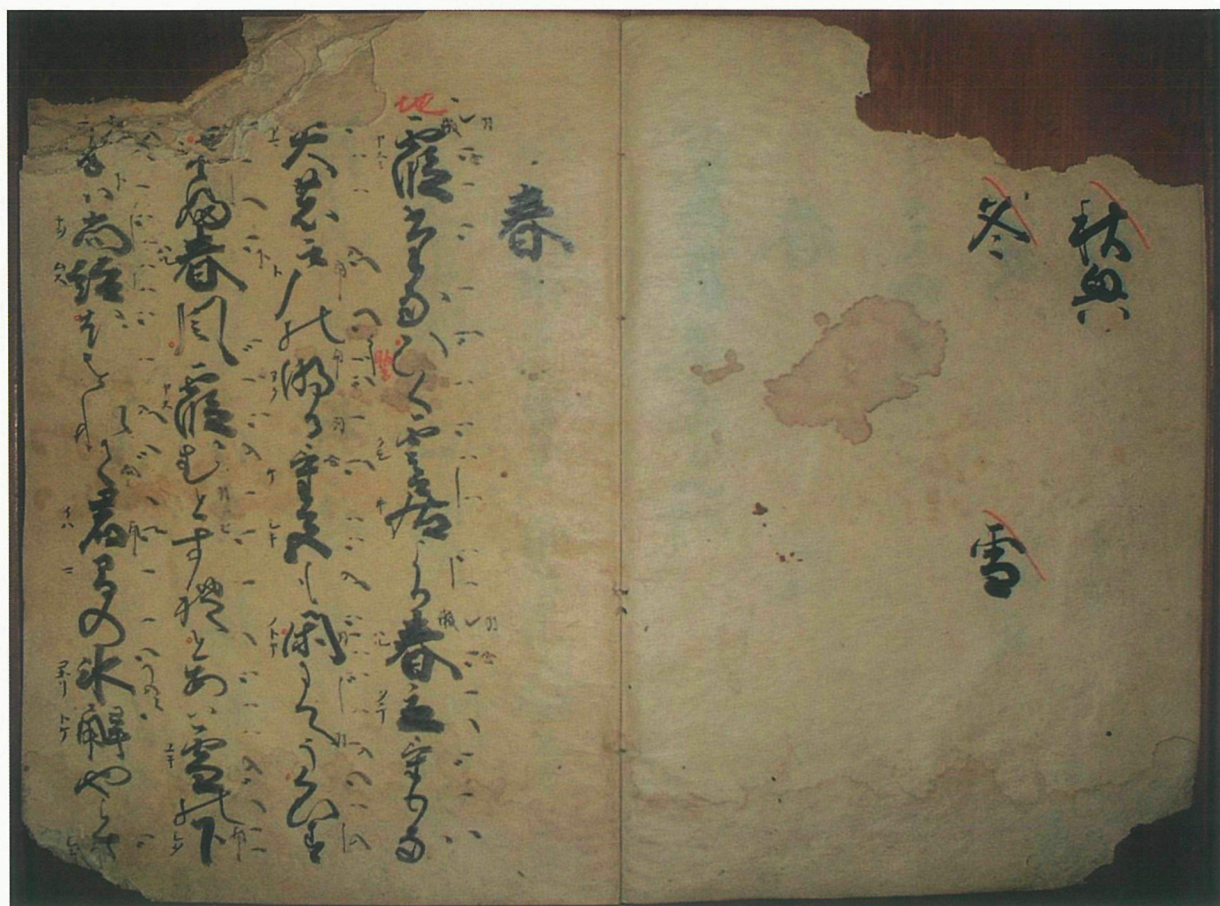


(表紙)



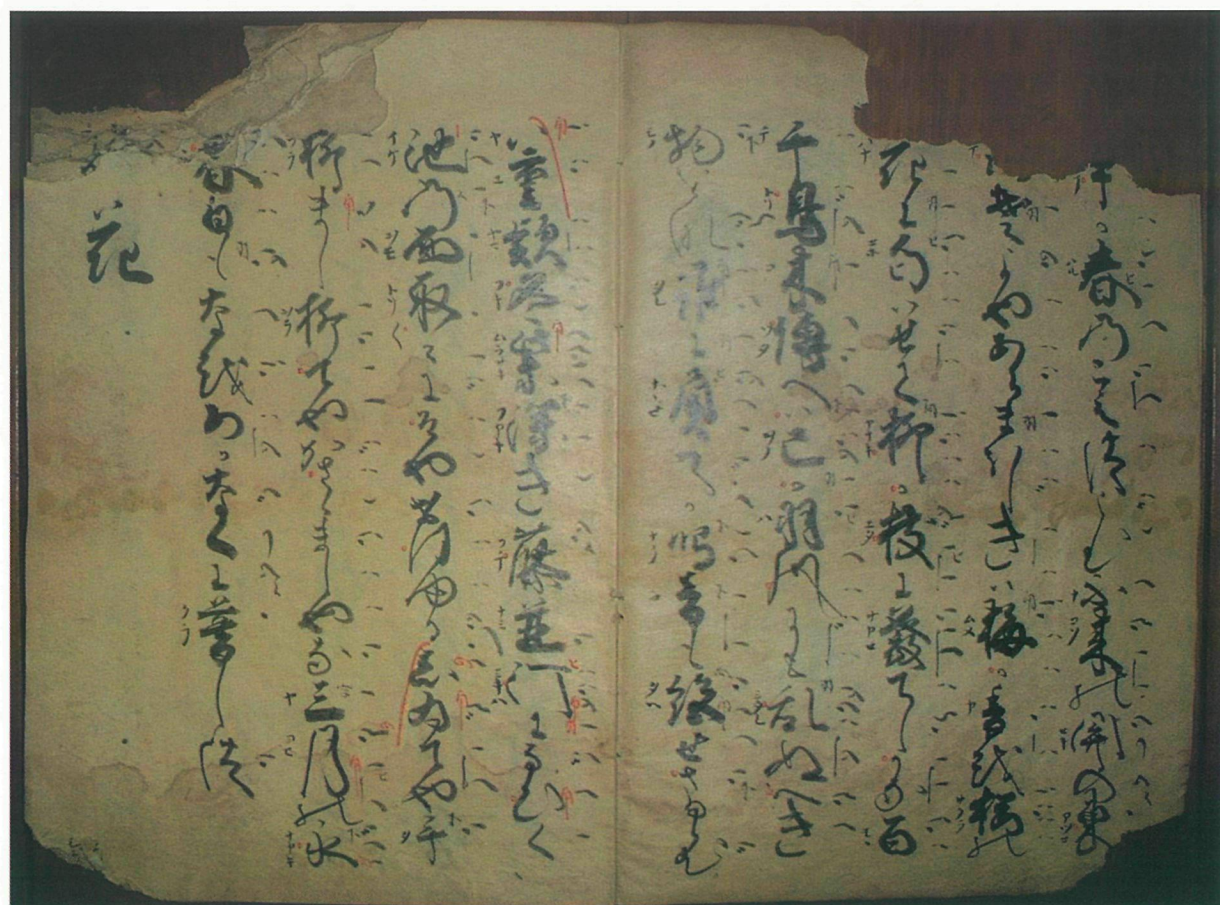
(目録)

(見返し)



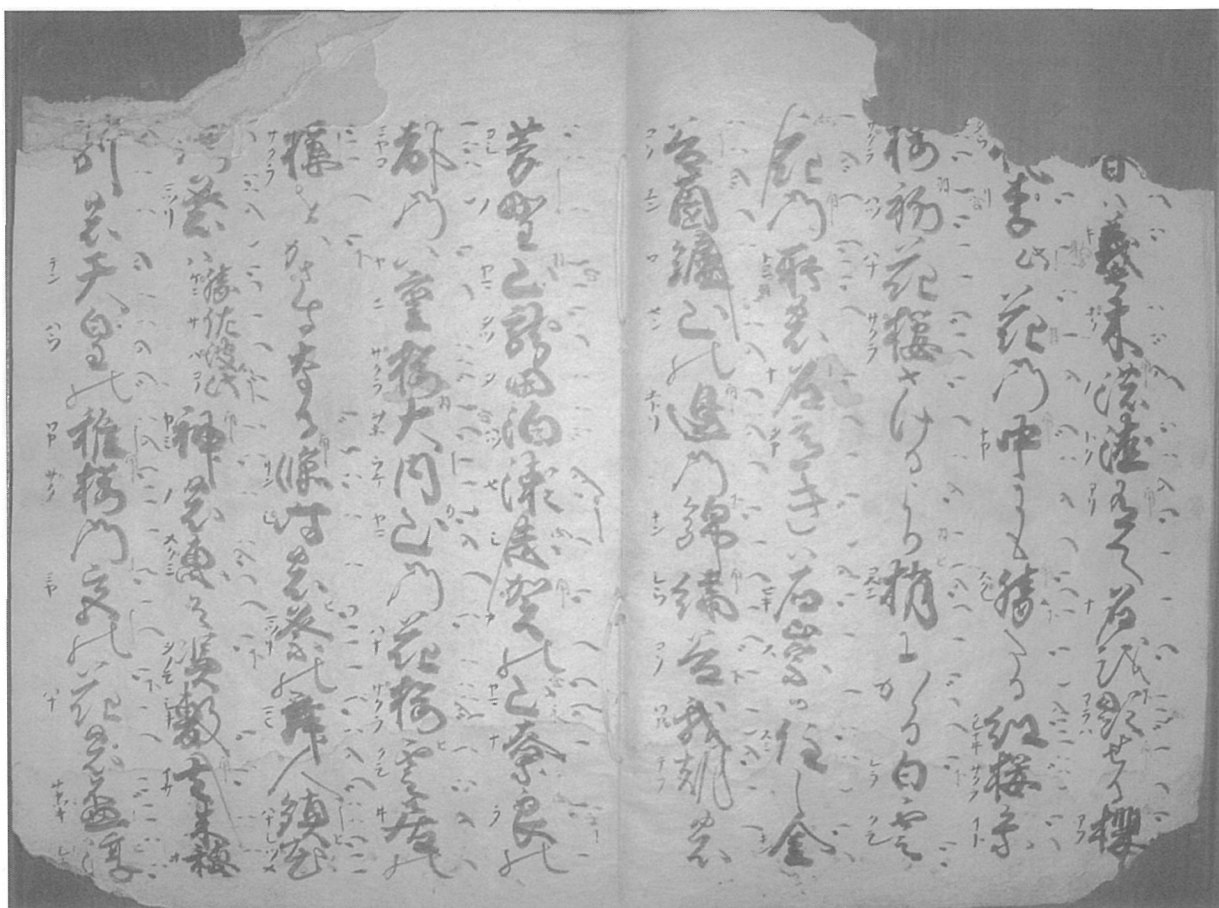
(1オ)

(1ウ)



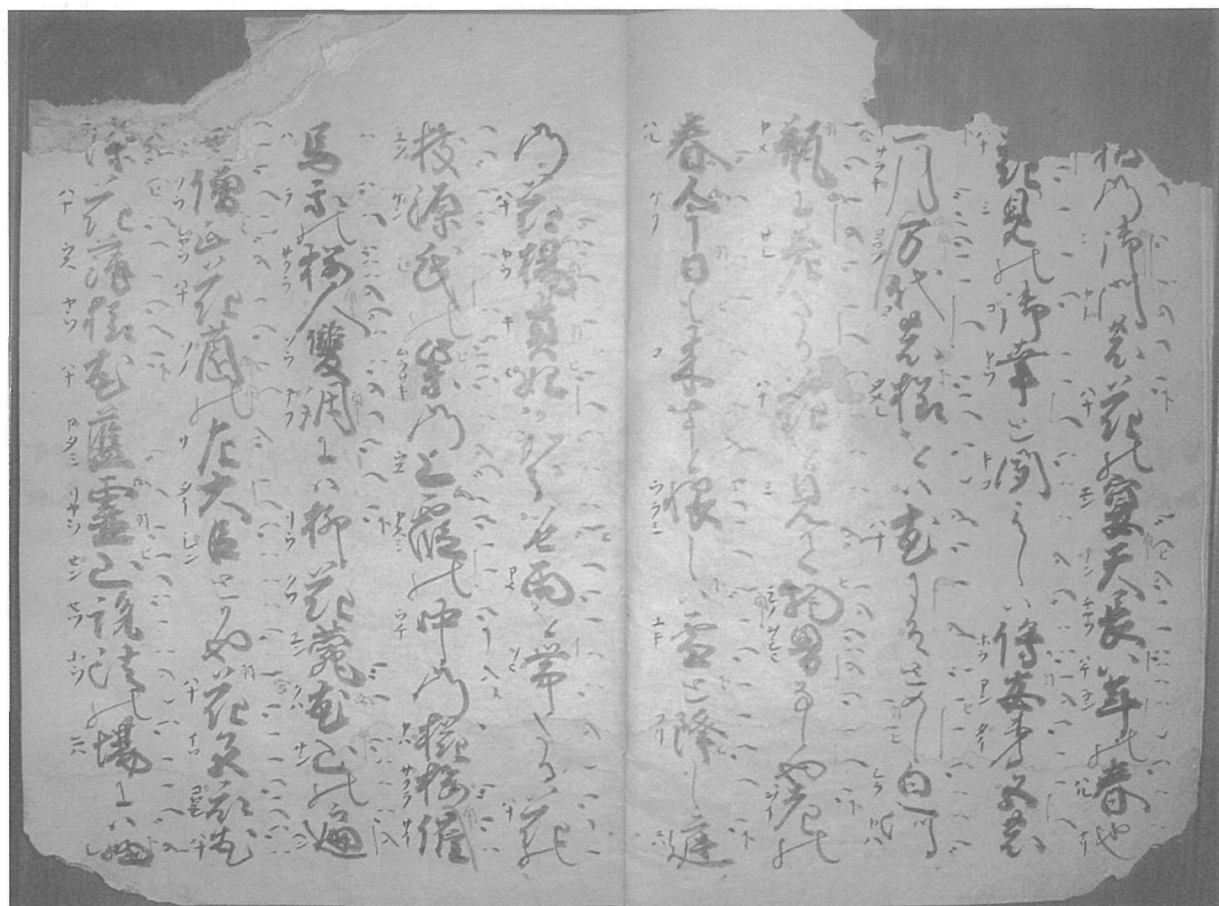
(2オ)

(2ウ)



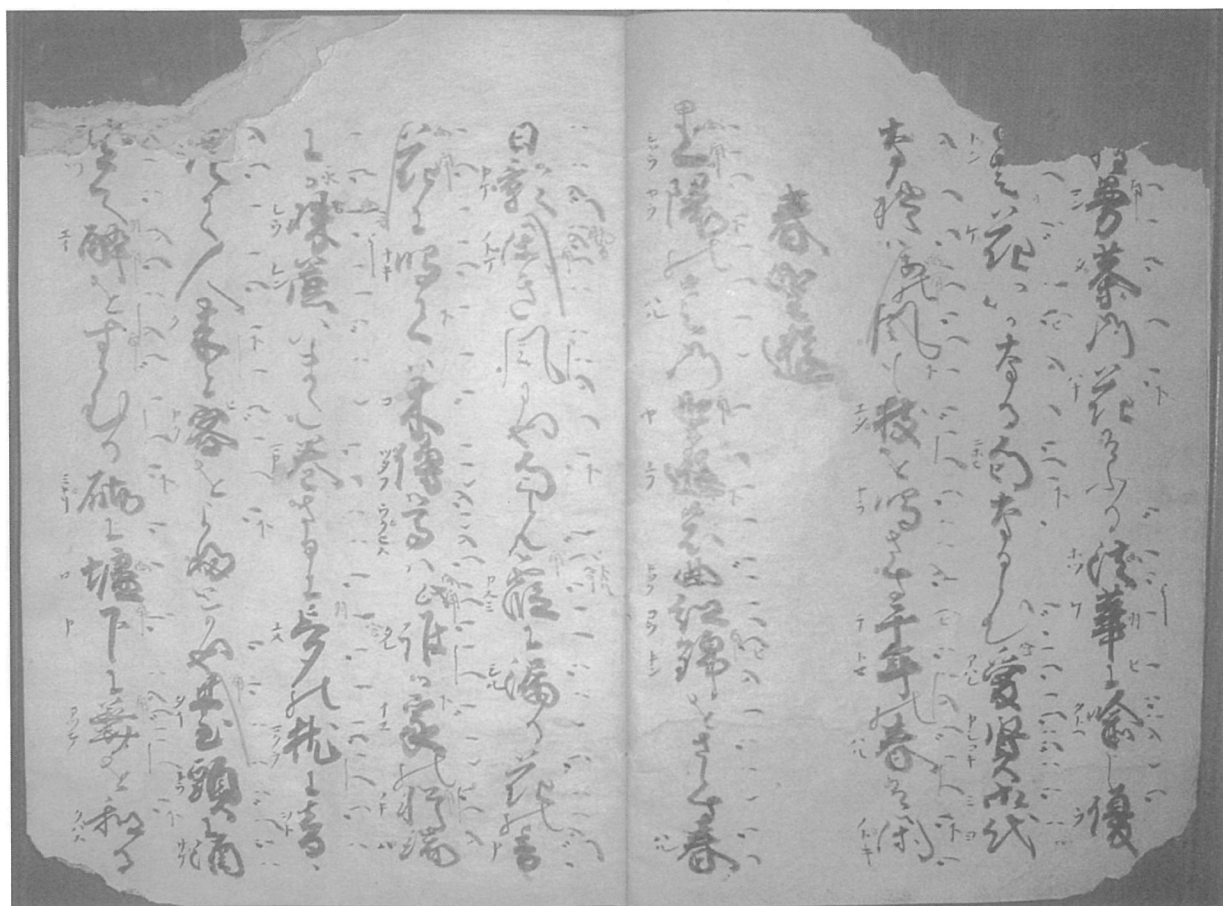
(3 オ)

(2 ウ)



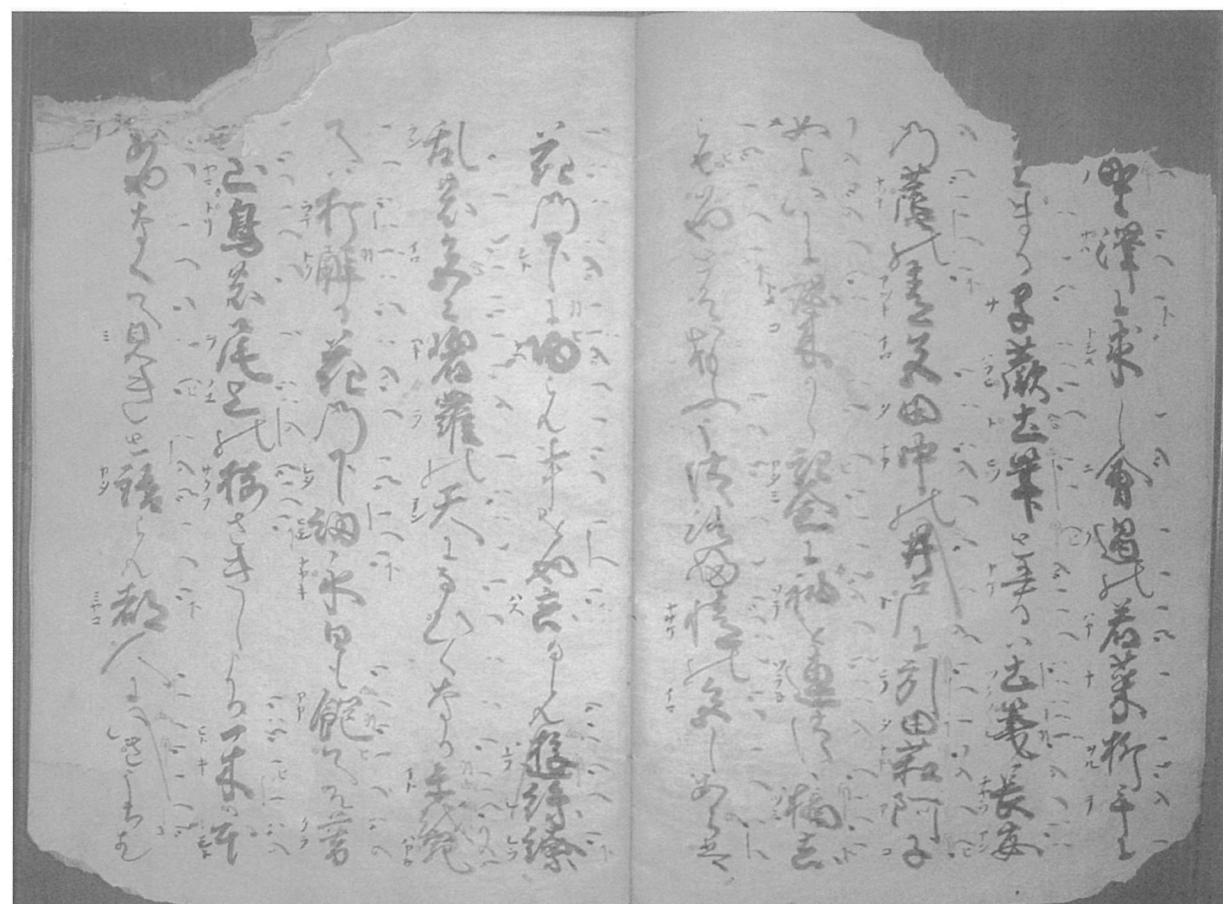
(4 オ)

(3 ウ)



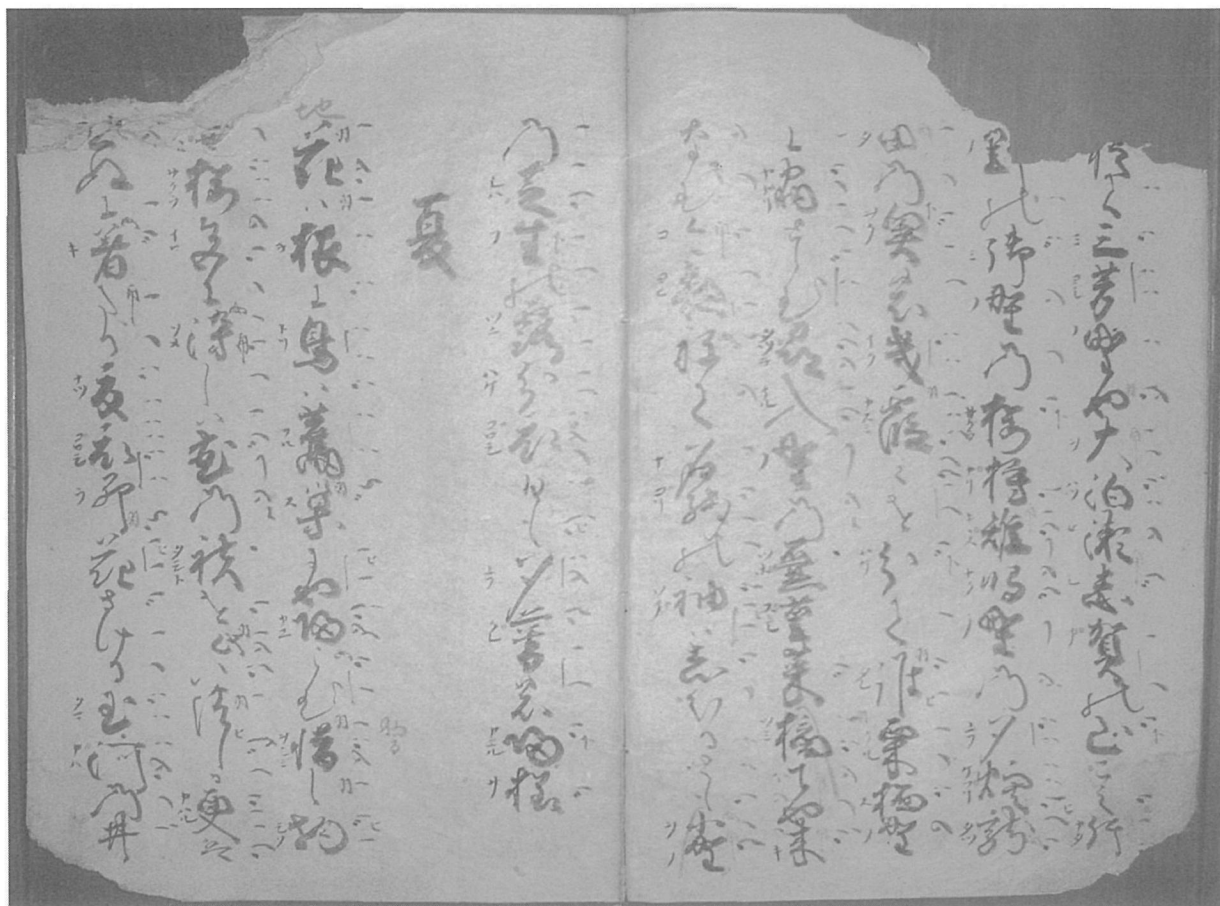
(5 オ)

(4 ウ)



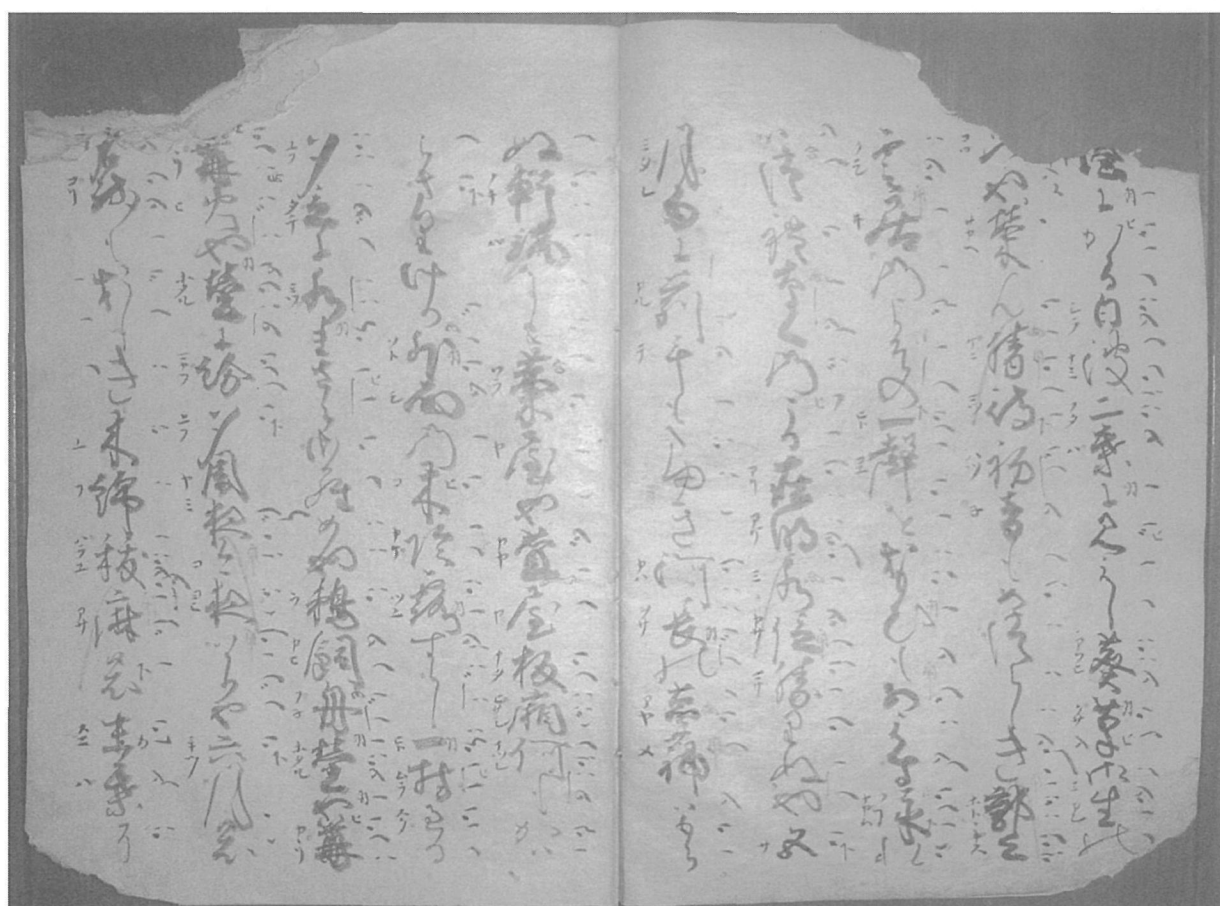
(6 オ)

(5 ウ)



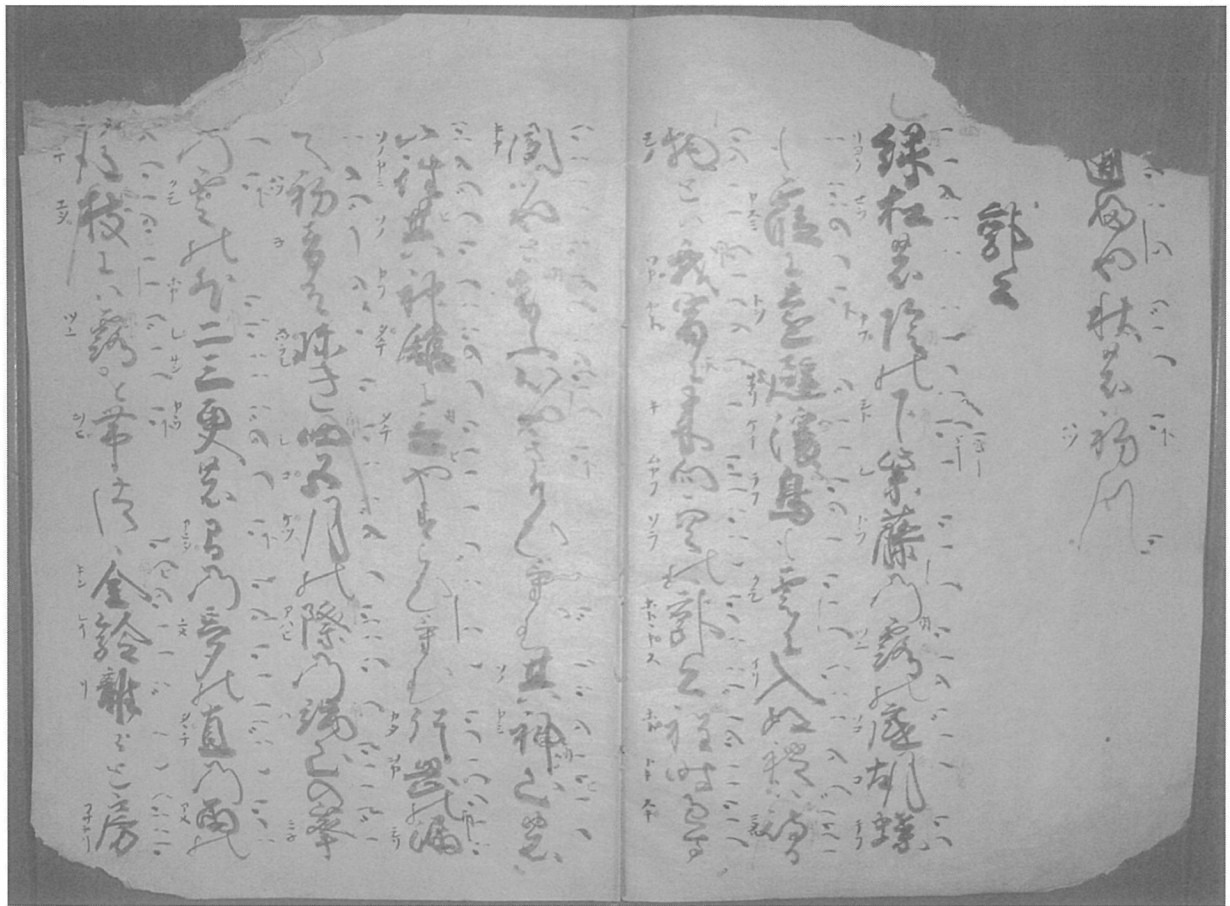
(7オ)

(6ウ)



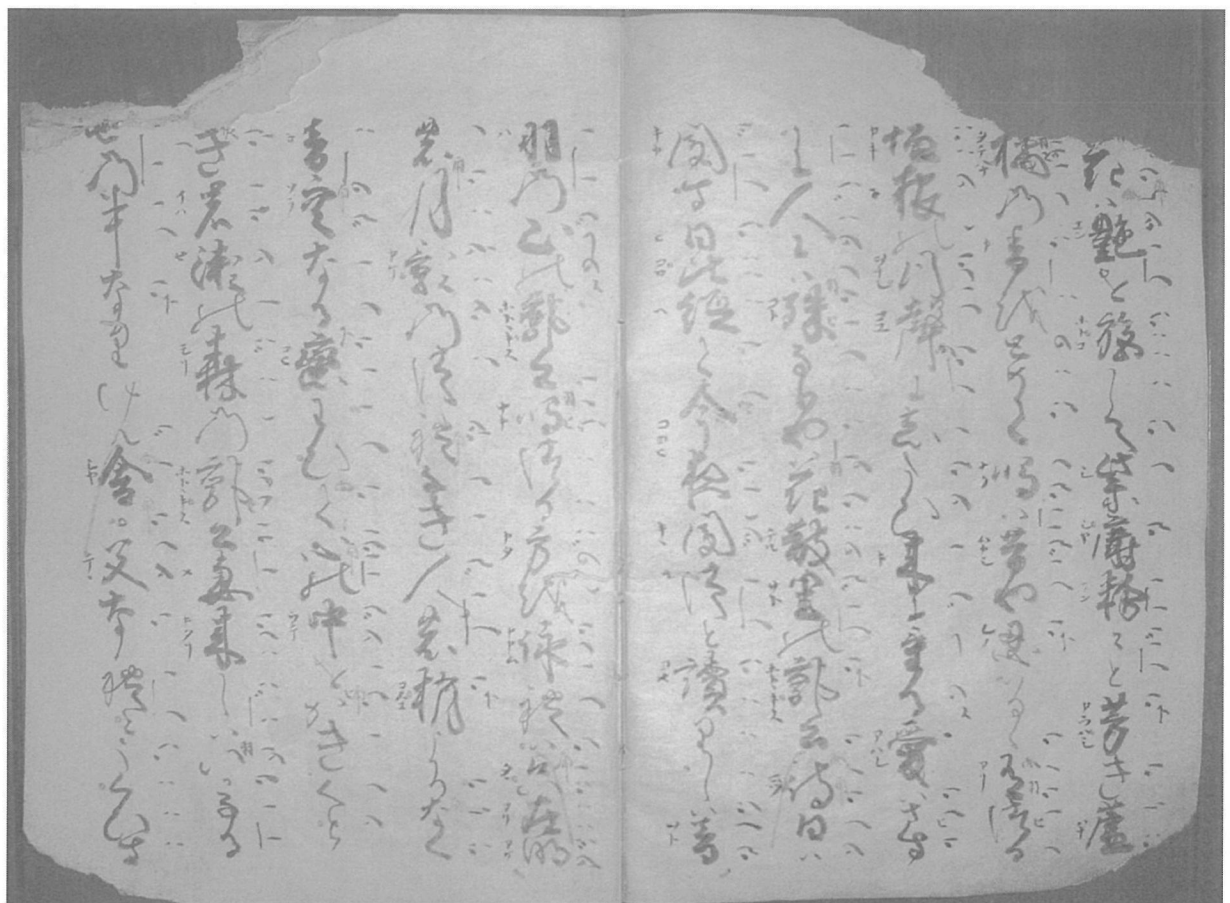
(8オ)

(7ウ)



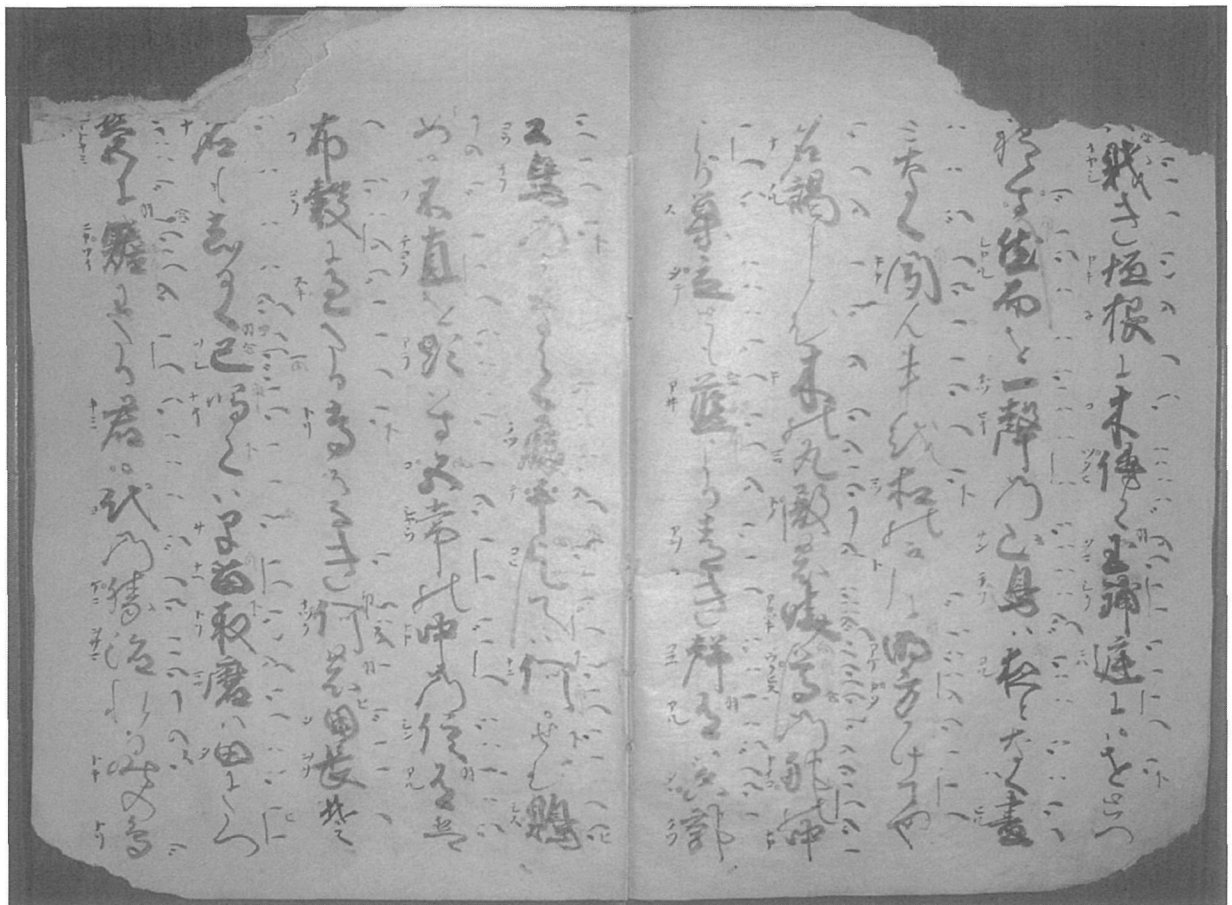
(9 オ)

(8 ウ)



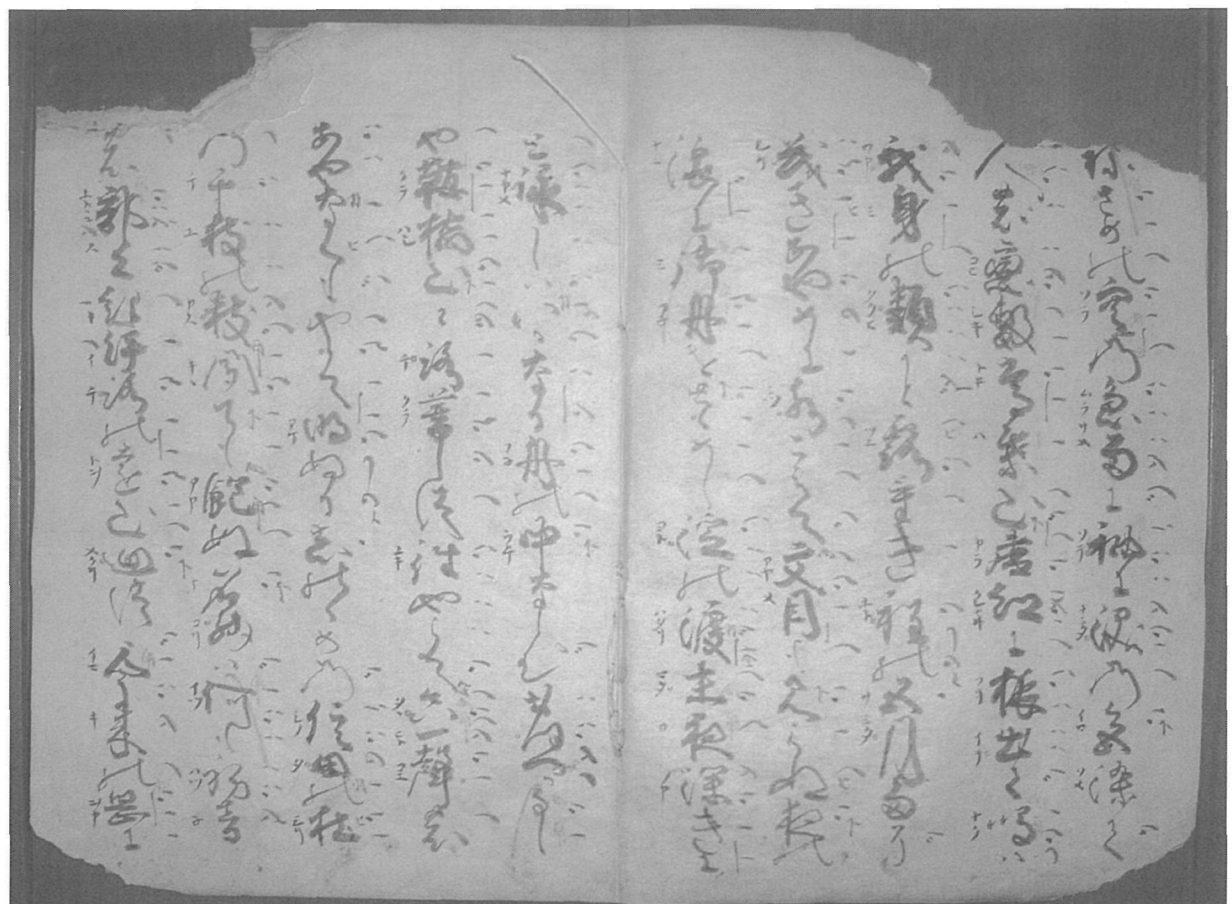
(10 オ)

(9 ウ)



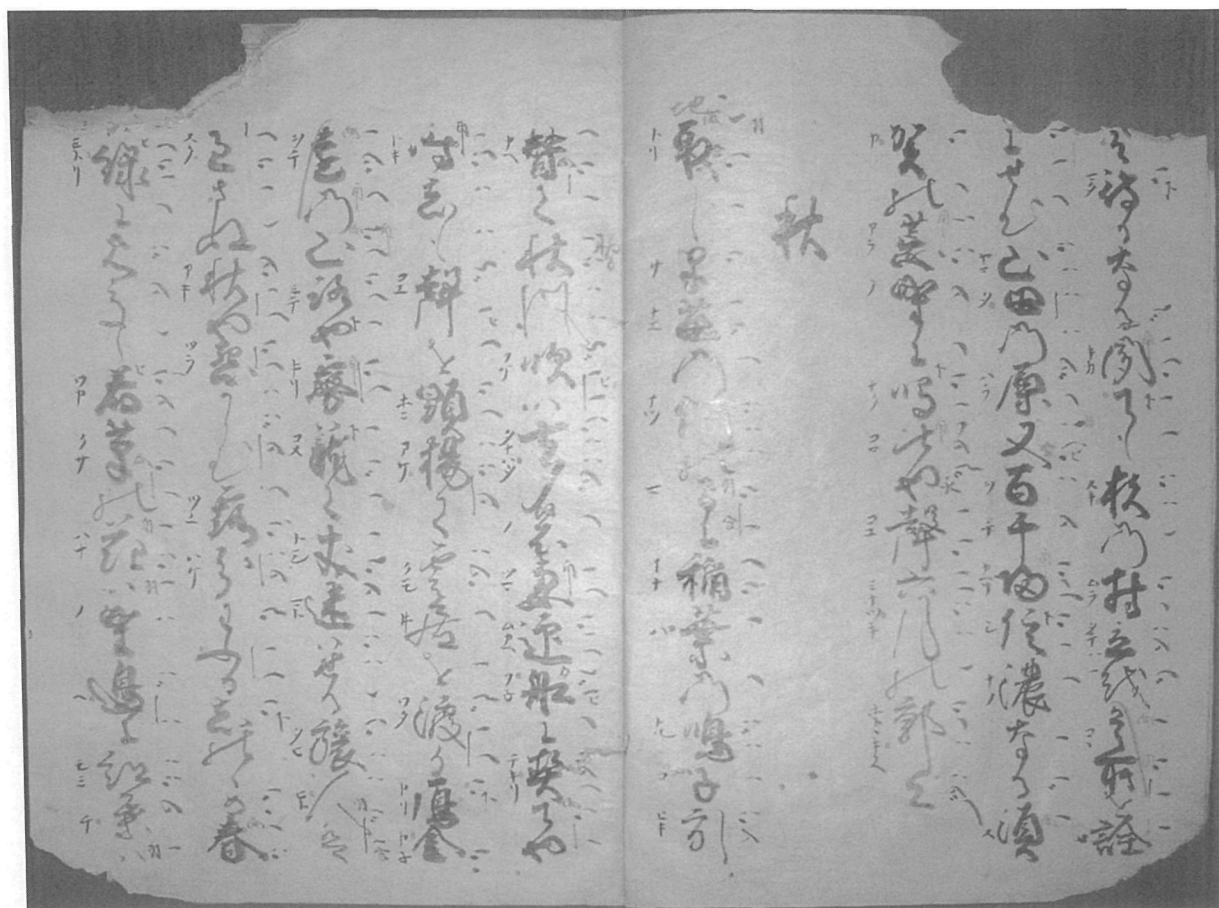
(11 オ)

(10 ウ)



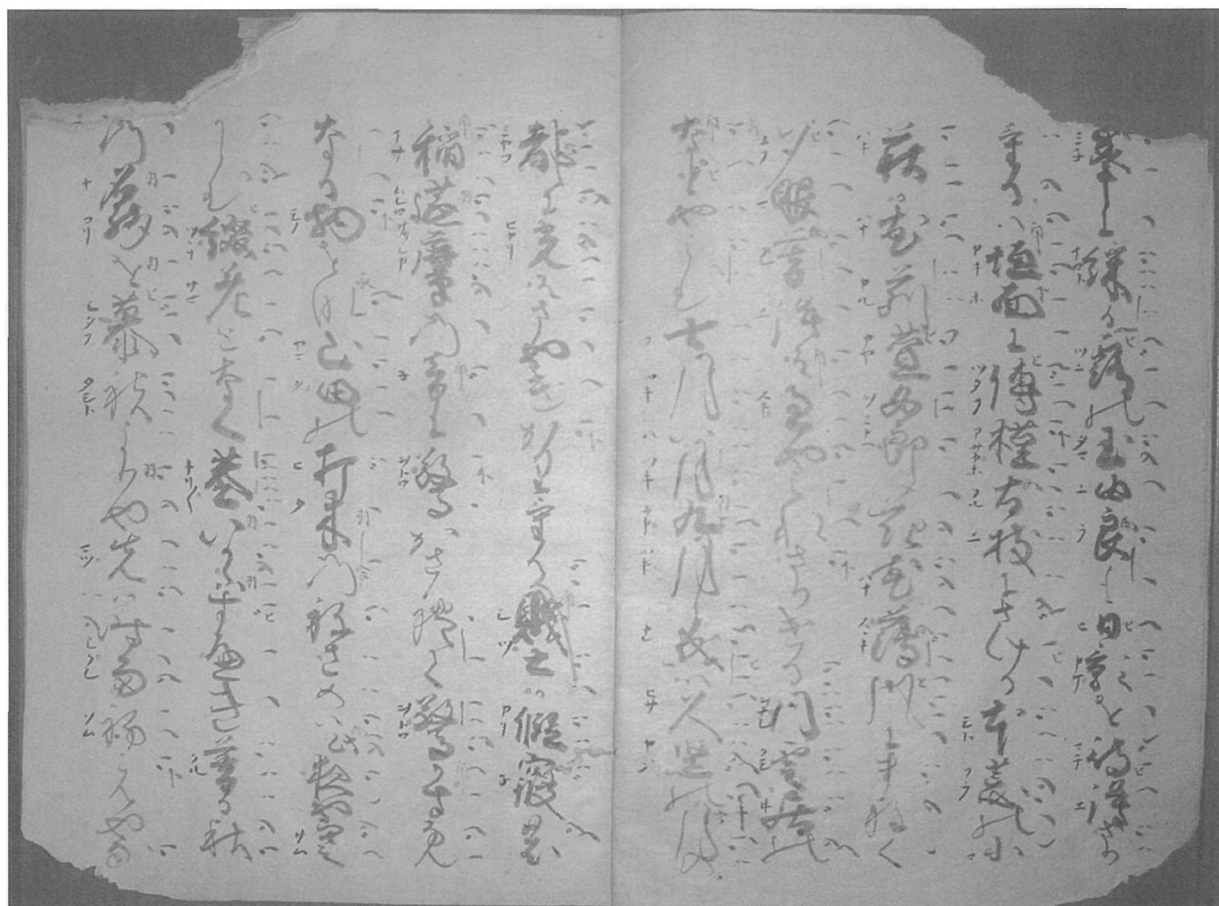
(12 オ)

(11 ウ)



(13 オ)

(12 ウ)



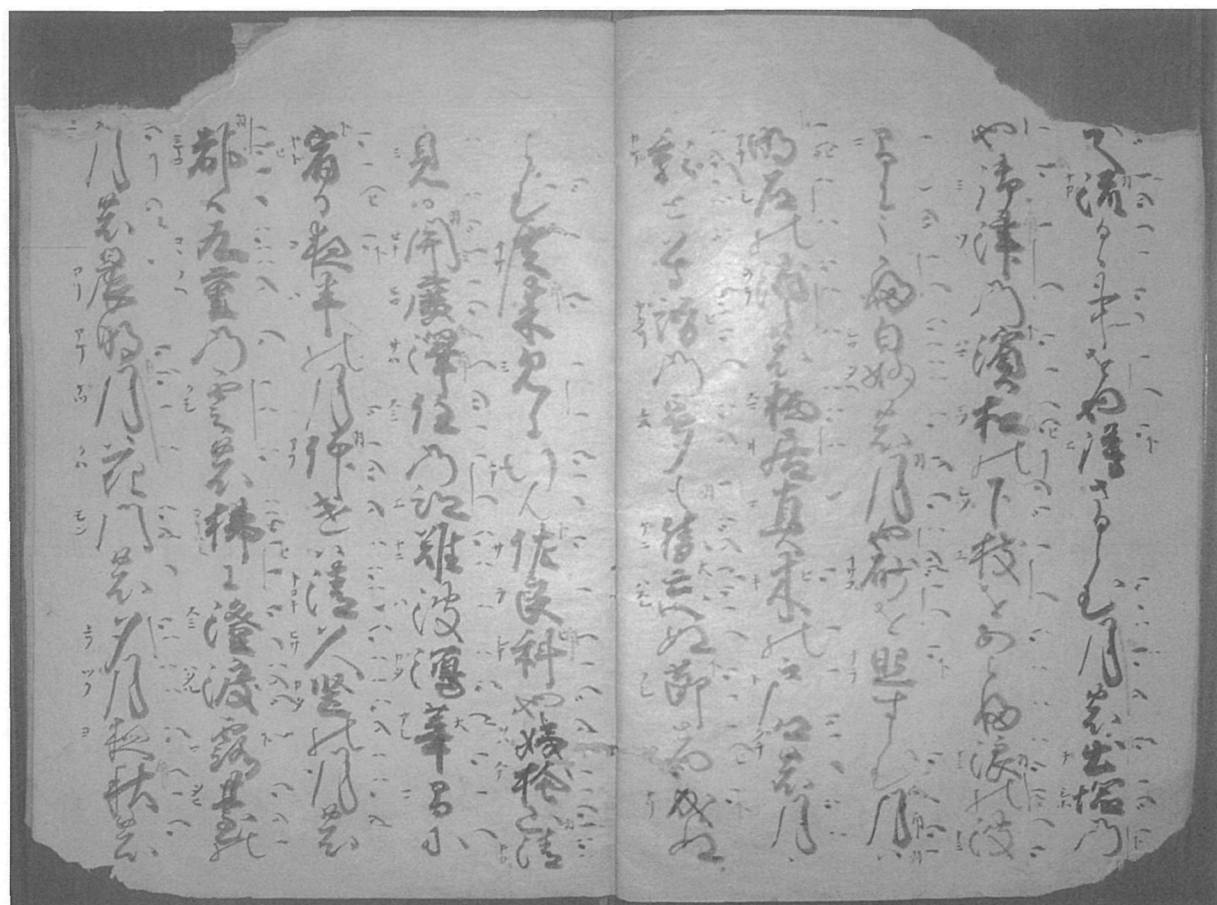
(14 オ)

(13 ウ)



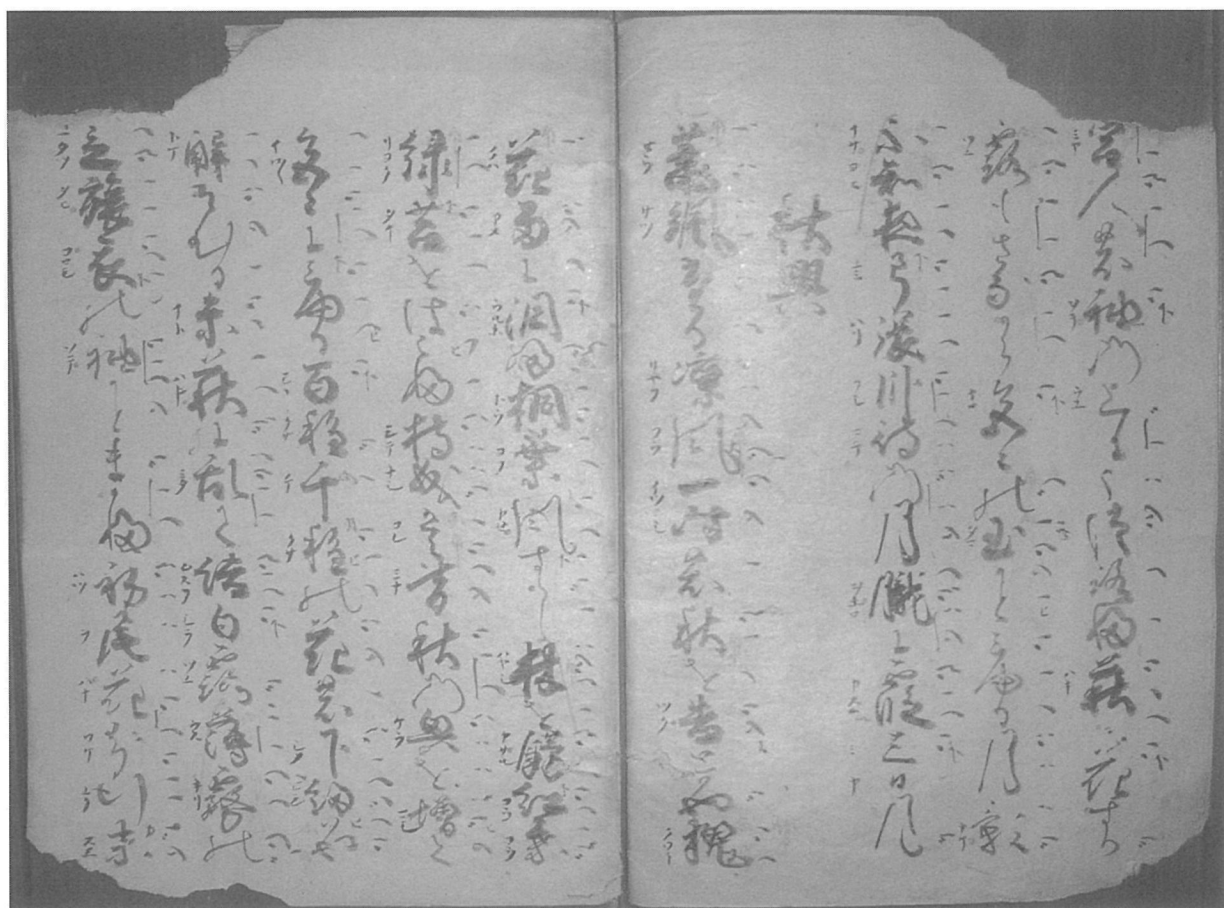
(15 オ)

(14 ウ)



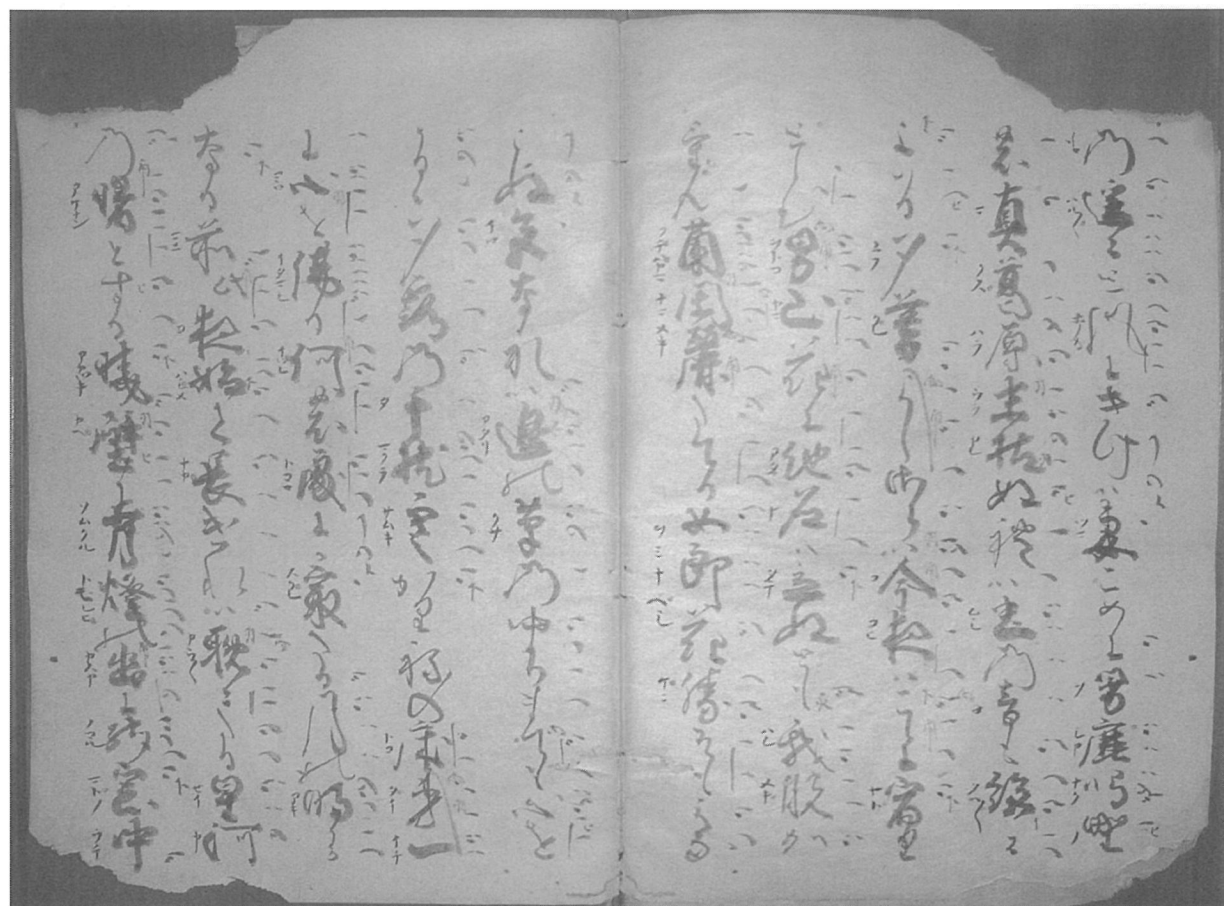
(16 オ)

(15 ウ)



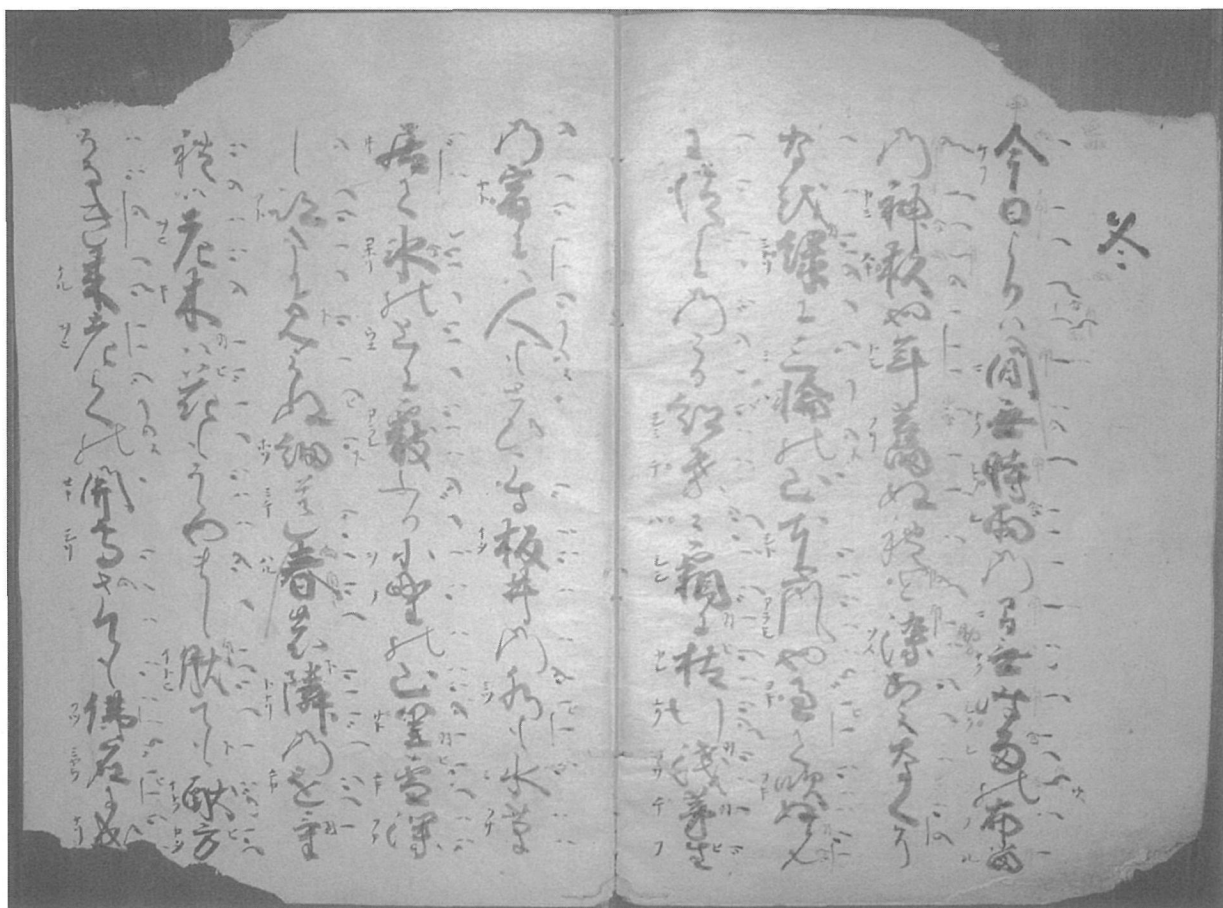
(17 オ)

(16 ウ)



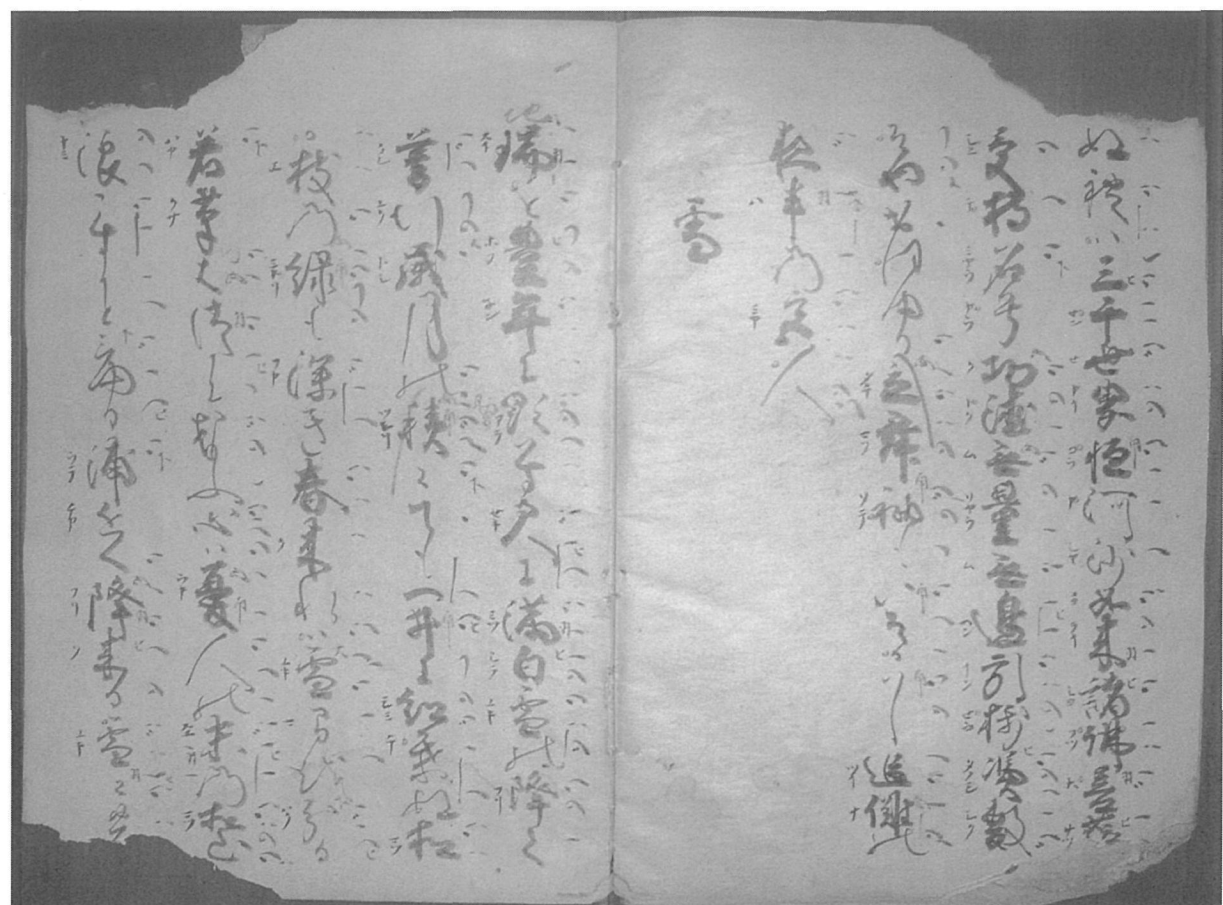
(18 オ)

(17 ウ)



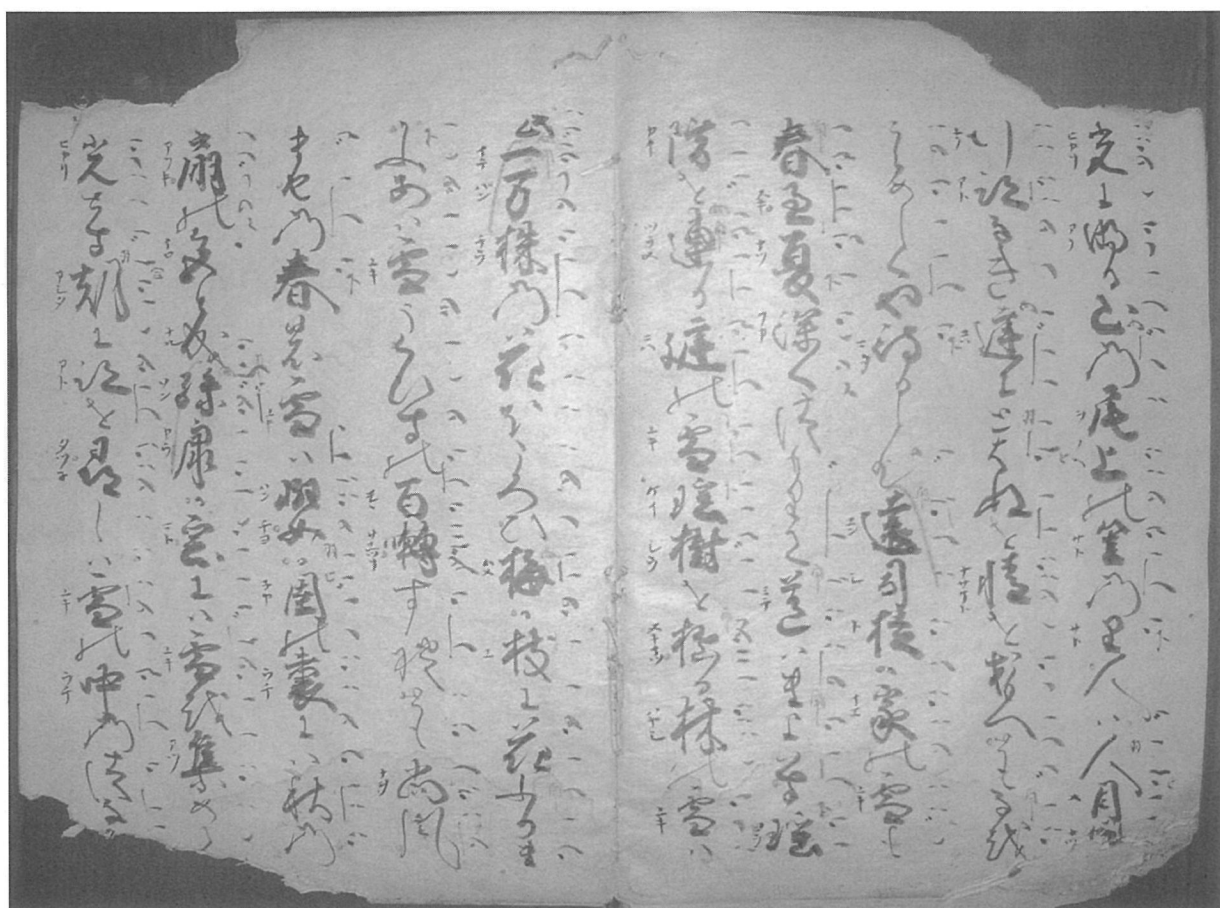
(19 オ)

(18 ウ)



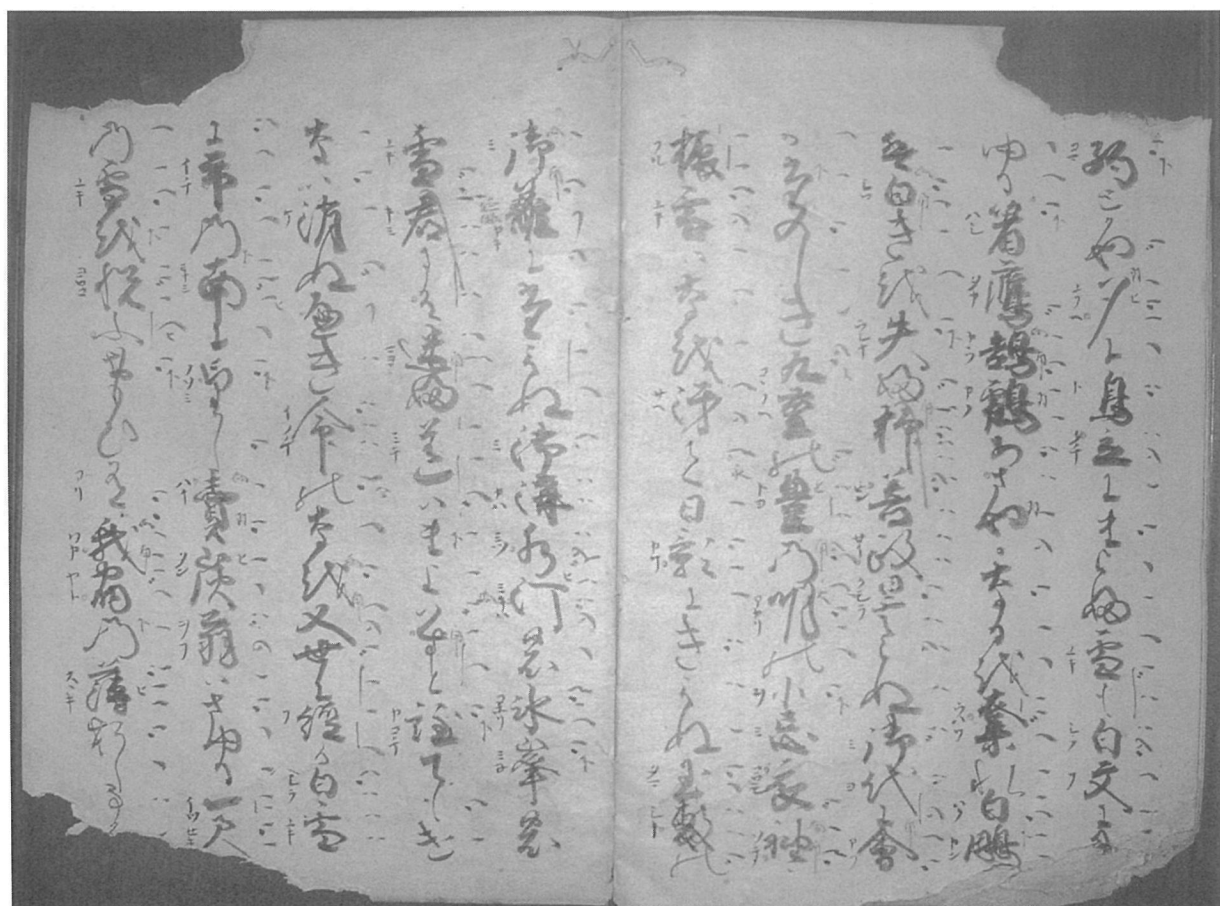
(20 オ)

(19 ウ)



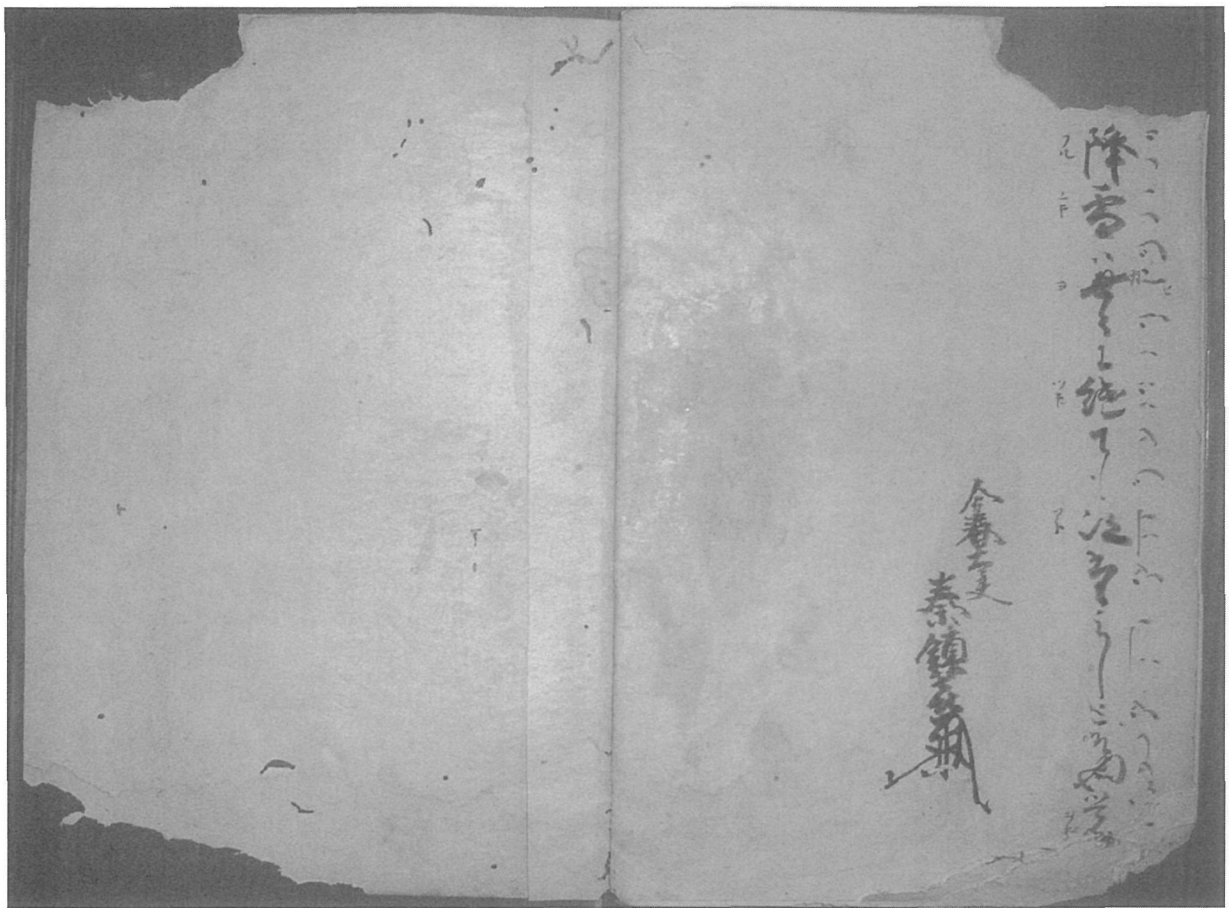
(21 オ)

(20 ウ)



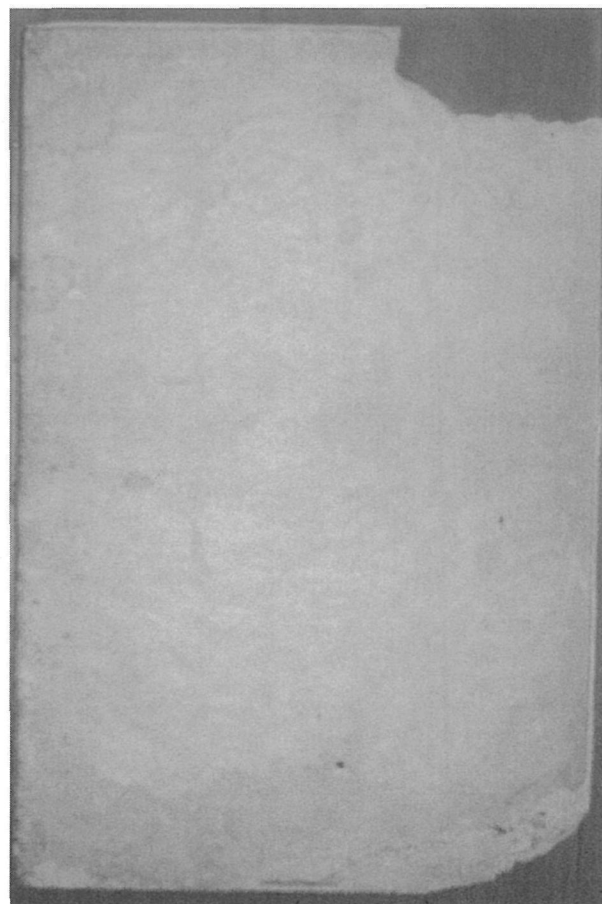
(22 オ)

(21 ウ)



(裏見返し)

(22ウ)



(裏表紙)